

明治期における津田仙の啓蒙活動

——欧米農業の普及とキリスト教の役割——

並松信久

目 次

- | | |
|--------------------|---------------------|
| 1 はじめに | 2 英語とキリスト教 |
| 3 農業実践の端緒 | 4 農業情報とキリスト教 |
| 5 学農社の設立と農学校 | 6 農業技術の普及—『農業雑誌』の刊行 |
| 7 農業技術の定着—地域特産品の形成 | 8 啓蒙活動と農民の組織化 |
| 9 キリスト教精神と学校教育 | 10 結びにかえて |

要 旨

津田仙（1837-1908）は、明治期においてキリスト教と深い関わりをもった農学者である。その事績は多方面にわたり、農産物の栽培・販売・輸入を手がけ、「学農社」を創設して、農業書籍や『農業雑誌』などの出版事業をはじめ、多くの農業活動を行なっている。その一方でキリスト教との関わりも深く、キリスト教精神に基づく学校の設立に関係している。

これまでの研究では、津田の農学者としての側面とキリスト教徒としての側面が、どのように結びついているのかという点は、あまり説明されてこなかった。本稿は津田の啓蒙活動を通して、農業とキリスト教の結びつきを明らかにした。

津田は農業改良や農業教育の実践、さらに盲啞教育や女子教育をはじめとする学校教育への理解と協力など、多方面の活動を行なっているが、それらはすべて伝統と偏見を打破する啓蒙活動であったといえる。しかもその啓蒙活動は国家や政府の支援に依らない「民間」活動であった。津田の農業における啓蒙活動は、官僚化に対する抵抗という側面をもっていた。津田にとって国家や政府の支援に代わるものがキリスト教（プロテスタント）であり、それが官僚化への抵抗と結びついた。

津田の場合、農業の科学的根拠やキリスト教の教理に関する造詣は深いものではない。しかし津田は啓蒙を重視しているので、難しい学術的な原理をできるだけ平易に説明し、簡明な言語によって農民に知識を伝え、農山漁村の振興の助けとなることを重視する。津田がめざすのは、農民が自立して、営利的ないし合理的な経済生活を営めるようにすることである。それを達成するには、農民における営利性の自覚が必要である。この自覚は、津田によればキリスト教によってこそ導かれる。

津田の啓蒙活動をきっかけに、地域の特産品が生まれている。たとえば山梨県の葡萄栽培や葡萄酒製造であり、大阪・泉州の玉葱生産である。また農民の組織化にも成功した地域があった。たとえば北海

道の開拓地であり、長野県の松本農事協会である。この津田の啓蒙活動の影響は、国内だけでなく海外にも及んだ。津田は学農社農学校と同様、キリスト教を創立の精神や指導方針に掲げる学校の設立に協力する。「東京盲啞学院」(現・筑波大学付属盲学校)、「海岸女学校」、「普連土女学校」(現・普連土学園)、「耕教学舎」(現・青山学院大学)、そして娘の津田梅子(1864-1929)が創設した津田塾大学などであった。

キーワード：津田仙、啓蒙活動、キリスト教、学農社、農業雑誌

1 はじめに

津田仙(1837-1908、以下は津田)は、明治期においてキリスト教と深い関わりをもった農学者である。その事績は多方面にわたり、農産物の栽培・販売・輸入を手がけ、「学農社」という組織を創設して、農業書籍や『農業雑誌』などの出版事業をはじめ、多くの啓蒙活動を行なっている。これら活動の一環として、津田は日本で最初に通信販売を行なっている。一方、キリスト教との関わりも深く、新島襄(1843-1890、以下は新島)と親交をもち、人間の自由と平等を説いた東京帝国大学教授の中村正直(1832-1891、号は敬字、以下は中村)とともに、“キリスト教界の三傑”とされる。キリスト教を通じて同志社大学(以下は同志社)・青山学院大学(以下は青山学院)・筑波大学附属盲学校などの創立にも関わる。津田の娘は後に津田塾大学(以下は津田塾)の創設者となる津田梅子(1864-1929、以下は梅子)であるが、この点で津田は津田塾の創立にも関わる¹⁾。

津田に関する研究業績は、娘の梅子に比して、それほど多くない。主に人物に焦点をあてた先行研究を中心に刊行の年代順に列挙すると、津田昇編『津田仙翁略伝』(津田昇(私家版)、1958年)、伝田功「明治前期啓蒙運動の一形態—農業改良運動とキリスト教」(伝田功『近代日本経済思想の研究—日本の近代化と地方経済』、未来社、1962年、143～242ページ)、都田豊三郎『津田仙—明治の基督者』(都田豊三郎、1972年、大空社から2000年に影印本の出版)、千葉県佐倉市教育委員会編『佐倉市郷土の先覚者 津田仙』(千葉県佐倉市教育委員会、1994年)、金文吉『津田仙と朝鮮—朝鮮キリスト教受容と新農業政策』(世界思想社、2003年)、高崎宗司『津田仙評伝—もう一つの近代化をめざした人』(草風館、2008年)、嶋田順好「津田仙の信仰と文化」(『キリスト教と文化』、第24号、2008年、79～106ページ)などである。

それぞれの研究業績は、農学者あるいはキリスト教徒としての津田に焦点があてられている。日本農学史のなかでは常に触れられる人物であるものの、農学者としてよりもキリスト教徒としての活動のほうに重点がおかれる場合が多い。しかしながら、この津田において農学者としての側面とキリスト教徒としての側面が、どのように結びついているのかという点については、あまり記述されたものが見当たらない。つまり津田において、明治期の日本農学がキリスト教からどのような影響を受けた

のか、あるいは逆にキリスト教の布教活動（学校の創立も含む）において、日本農業がどのような影響を与えたのかという問題は、依然不明なままである。津田において農業とキリスト教が「両立」されていたとすれば、互いに何らかの影響があったはずである。

これまで津田の人物像については、様々な評価がなされている。そのなかでも興味深いのは、新渡戸稲造（1862-1933、以下は新渡戸）が津田の逝去時に下している評価である。当時の新渡戸の価値観が反映された評価ではあるが、農業とキリスト教に造詣が深い新渡戸が、津田の事績を高く評価している²⁾。いささか長いが引用すると、新渡戸は、

そう津田翁かね、翁に感心するのは其思想である。其着想である。彼の頃は人も知つての通り少し身分のある者は誰れでも、法律や政治の方面に向つて立身を謀つたものである。翁としても其頃は立派な幕府の官人であるから、立身しようとすれば随分立派に出来たのに、断然民間に下つて農家となり、果樹や蔬菜の培養法に力を尽し、或は牧地を開いたりして、其の為めには自分の資産を抛つた事もあるのは豪い。而して農業は一の卑業で無い事を天下に教えて、遂には今の学農社を起した。今でこそ珍らしくも何ともないが、其頃の事としては実に奇抜な着眼であるのに、其の功勞を国家が少しも認めぬと云ふは、実に遺憾な事と思ふ。学問としての学問は余り無い人であつたが、世間には能く通じて居て、色々な事を能く知つて居た。先ず俗な趣味に富んだ又た談話に富んだ、尤も多くは自分の経験談であるが一性格は円満な平面的な名物男であつた（『国民新聞』1908年4月27日付。句読点は引用者）。

と語っている。津田が政府に頼らず民間で農業に工夫を凝らして、その啓蒙普及に尽力したことを賞賛している。農学という学問研究をしたというわけではないが、その実践活動はめざましいものである。国家がその功勞を認めないのは遺憾であるという。

新渡戸の評価にもあるように、津田は農業の実践活動において優れていた。その実践活動とは啓蒙活動に他ならない。津田は自ら農業に着手するものの、真骨頂は農業の啓蒙活動にあった。津田は農業改良や農業教育の実践、さらに盲啞教育、女子教育をはじめとする学校教育への理解と協力など多方面の活動を行なっているが、それらはすべて伝統と偏見の打破をめざす「開化」をもたらすものであった。つまり津田の多方面にわたる活動は、啓蒙に重点が置かれていた³⁾。

津田の実践活動をみる場合に、注意しておくべき点がある。それは新渡戸も指摘しているように、「民間」活動として行なわれた点である。津田の活動は国家や政府の支援を必要とするものではなかった。それどころか津田の啓蒙活動は、官僚化に対する抵抗という側面をもち合わせていた。後でくわしく述べるが、津田は国家や政府の支援に代わるものとして、キリスト教を考えたのであり、それが官僚化に対する抵抗へと結びついたのではないかと考えられる。

ところで一般的に農学という科学において、その思想性を問われることはない。確かに農本主義という思想が流布することもあり、それは時として政治性や宗教性を帯びるが、それは科学ではない。

農学の場合、むしろその思想性から脱却する過程こそが、科学としての成立過程であるかのように語られる。しかしながら、科学も人間の営為である以上、その背後には政治性や経済性があり、場合によっては宗教性や価値観とも深く結びつく⁴⁾。たとえば日本農学の場合では、駒場農学校（現・東京大学農学部）が廃校の危機に直面したとき、存続の大きな支えとなったのは、学生のなかに定着していた理念であった。しかもその学生は、津田が設立した学農社農学校が閉校になったために、そこから転校してきた学生であった。もちろんその理念は津田の影響によるキリスト教精神であった。つまり駒場農学校が廃校の危機から脱することができたのは、キリスト教精神という理念があったからである。これは札幌農学校が廃校の危機に直面した時と酷似している。周知のように、札幌農学校（現・北海道大学農学部）ではクラーク（William Smith Clark, 1826-1886）によるキリスト教精神の影響が強みられ、この精神が支えとなって廃校を免れ、今日に至るまで建学の精神の礎をなしている⁵⁾。

本稿では津田における啓蒙活動を通して、農業とキリスト教との関係を明らかにしていく。以下では津田の経歴にしたがって、その事績を分析していく。津田の経歴は青少年期に洋学から学び始め、それが英語の習得へと結びつく。そしてアメリカ視察やウィーン万国博覧会への派遣などを通して、多くの農業情報を得るとともに、農業発展の背景にあるキリスト教に注目する。そして日本において学農社を創設し、農業の啓蒙活動を行ない、キリスト教精神に基づく各学校の設立に関わる。本稿ではこれらの展開過程における、農業をめぐる活動とキリスト教との関連、キリスト教の布教と農業との関連を明らかにしていきたい。

なお本稿の引用文には、不適切な表現が含まれている部分があるが、史実を重視する立場から、あえて訂正を加えていない。さらに引用文中の句読点については、読みやすくするために一部、筆者が付け加えた部分がある。また人物の生没年については、わかる範囲でのみ記した。

2 英語とキリスト教

津田の父は下総国佐倉藩の堀田氏の家臣小島良親（善右衛門）であり、津田はその四男（幼名は千弥）に生まれる。1851（嘉永4）年に元服して桜井家の養子となり、1861（文久元）年に津田家の初子と結婚し、その婿養子となって津田姓を名乗る。15歳で佐倉藩藩校の成徳書院（現・千葉県立佐倉高等学校）で学んでいる。この学校では藩主堀田正睦（1810-1864）の洋学気風もあり、藩命でオランダ語や英語の他に、洋学や砲術を学んでいる。

1857（安政4）年に「須らく洋学を研究すべし、一日遅ければ一日損ありと、乃ち江戸に出で百事^{なげう}を抛って洋学に志す」（『農業雑誌』、第1020号、1912年、208ページ）として江戸へ向かい、蕃書調所教授方の手塚律蔵（1822-1878、以下は手塚）の私塾（又新堂^{ゆうしん}）に入門して、蘭学を習っている。蕃書調所が設置された元々の目的は、蘭語教育と外交文書などの翻訳であるので、津田は手塚の私塾に入門したが、当初の1年間ほどは蘭学を学んでいる⁶⁾。もっとも手塚は独学で英語を学び、蕃書調所

の英語教授でもあったので、津田は英語に触れる機会をもった。又新堂では塾頭格として西周（1829-1897、以下は西）が在籍していた。西は中浜万次郎（1827-1898）から『初級英文法教科書』を借用し、『伊吉利文典』^{イギリス}として又新堂から出版していた。西と津田はこの著書によって英語を学んでいる。当時、又新堂でともに学んだ塾生には、西村茂樹（1828-1902、佐倉藩出身、以下は西村）、木戸孝允（1833-1877、以下は木戸）、神田孝平（1830-1898）、杉亨二（1828-1917）らがいた⁷⁾。木戸を除くほぼ全員が、後に明六社の社員となっている⁸⁾。また後に津田と親交を深めることになる新島も、短期間ではあるが、この塾で学んでいた時期がある。

津田は又新堂では英語に触れる程度で、本格的に学んだわけではなかった。当時の英語をめぐる状況は、1858（安政5）年に江戸へ出てきた福沢諭吉（1835-1901、以下は福沢）によれば、「今まで数年の間死物狂ひになって和蘭の書を読むことを勉強した。其勉強したものが、今は何もならない。商売人の看板を見ても読むことが出来ない、左りと誠に詰まらぬ事をしたわいと、実に落胆して仕舞た。（中略）何でもあれは英語に違ひない、今我国は条約を結んで開けかゝつて居る、左すれば此後は英語が必要になるに違ひない、洋学者として英語を知らなければ逆も何にも通ずることが出来ない、此後は英語を読むより外に仕方がない」⁹⁾ というように、蘭学よりも英語を学ぶほうが役に立つという風潮にあった。そこで津田は1859（安政6）年に、横浜の福地源一郎（1841-1906）の塾に入門して、英語の習得につとめる。この塾で津田は松木弘安（1832-1893、後の寺島宗則）と知り合う。その後1860（万延元）年に一旦江戸にもどり、再び横浜において、今度は通詞であった森山多吉郎（1820-1871）の下で英語を学ぶ¹⁰⁾。津田は1861（文久元）年に外国奉行通弁役として採用される。津田のほかに、主に蕃書調所から5名（杉田玄瑞、津田真道、杉亨二、東条礼三、村上英俊）が採用された。

当時の津田の英語について、親交のあった木村熊二（1845-1927、後の明治女学校校長）は、「君は生来はなはだ急劇なる人にて、その英文典を講読するにあたり、一行あるいは二行を脱して平然として読み下す。座客皆笑うもあえて意となさず。書を読むはその大意を了解せば足れり。なんぞ切々字句に拘泥せんや」¹¹⁾ と評している。津田の英語はかなり荒っぽいものであった。英語は手段にしかすぎないと考える津田にとって、英語によって伝える内容の把握こそが重要であった。

津田は蕃書調所に出仕していた当時、蘭学や英語のみを学んだわけではなかった。津田は後に、「余が若年の頃は耶蘇教と言へば一般に悪しざまに罵るものゝみありしが、友人に杉田廉卿なる人あり。（中略）当時廉卿は翻訳方にて福地源一郎氏及び余などと務向の同じかりしまゝ、至って親しかりき。廉卿は英書と蘭書を解しゝが、元来宗教心深き人として、解剖学など究めゆくに従い、遂に神を認め、而して之を奉ずるには、基督教ならざる可らずと信ずるに至りぬ。新島襄氏即ちそのころの七五三太君に斯教をすゝめしもこの廉卿なり。かくて廉卿は漢籍に通ずる吉田賢甫らと共に、英訳、漢訳の教書を調べ、まことに神こそ天地の主宰なれと主張しぬ」¹²⁾ と回想している。津田はこの時点で蘭書や英書を通して、キリスト教に関心を抱いたようである。

津田とキリスト教のつながりを考える場合に、新島との関係は見逃せない。津田は蕃書調所を介して新島と知己となる。新島は1864（元治元）年に日本を密出国して、1866（慶応2）年以降に、アメリカと故郷の安中との間で書簡のやり取りをしている。その書簡のすべては、津田が「氏が渡米してから両親に手紙を送るにも、又、両親から米国に手紙を送るにも、皆老生の手を経たものである」¹³⁾と記しているように、密出国した新島に代わり、幕府の役に就いていた津田が仲介した。津田と新島とはその後も親交をもち続け、学農社（1875年設立）と同志社（同年設立）との関係を通じて、より親密になっていく。津田は新島を介して、キリスト教への関心を深めていく。しかしキリスト教に対して関心をもつものの、同志社と協力関係にあったキリスト教会派に対して、親近感をもったわけではなかった。後でくわしくみるが、津田はメソジスト派の宣教師とは親密な協力関係にあったが、新島や同志社を支援したアメリカン・ボードの宣教師とは一線を画していた。アメリカン・ボードの宣教師を嫌悪する津田は、新島（身分はアメリカン・ボードの準宣教師）のことを「宣教師の奴隷」とまで言っていた。

津田がアメリカン・ボードの宣教師を嫌悪していた理由は定かではない。しかし1878（明治11）年にアメリカン・ボードのグリーン（D.C.Green）との間で何か紛争があったようである。さらに娘の梅子も宣教師に対して良い印象をもっていなかったようである。「アメリカ人はあまりにもお高くとまっていて、充分日本人と交わろうとはしません」¹⁴⁾と語っていることから、梅子は宣教師の姿勢に問題があると考えていた¹⁵⁾。もっとも津田は宣教師すべてを毛嫌いしていたわけではなさそうである。これを暗に示しているのは、1878（明治11）年から翌年にかけて、同志社の宣教師の帰化問題が起こった時に、津田は新島に協力して、その解決にあたっているからである¹⁶⁾。

津田と新島の関係から話がやや先走ったが、津田が通弁役に就いた時点にもどる。1867（慶応3）年に幕府発注の軍艦引取り交渉のために、勘定吟味役の小野友五郎（広胖）と勘定方の松本寿大夫がアメリカへ派遣される。この派遣団に通訳として、津田（支配通弁御用出役）、福沢（調役次席・翻訳御用）、尺振八（1839-1886、通弁御用御雇、尺は当時アメリカ公使館の通訳、以下は尺）の3名が随行する。津田にとって初めての海外渡航であった。

このアメリカ行きは約6ヶ月に及んだが、津田はアメリカをみて、男女尊卑の区別がなく、自由な交わりをしているという風習に強い印象を受ける。それは強烈であったようであり、この時に現地の風習にしたがって断髪を決意する。3名の職務分担については、主に通訳は会話が得意であった尺が担当し、津田は翻訳などの書記官のような役割を果たした。福沢の英語力は「公務の遂行には役に立たない」ものであったようであり、もっぱら慶應義塾の書籍購入に熱心であったといわれている¹⁷⁾。

津田はアメリカ視察で農業に関心をもつ。津田は「四民平等尊卑の別なく、ことに農家の富裕にして、農業は国家の幸福を来すべき事業たるを知り、しかして我が国農家の地位を高め、農業の発達を企画せん」と語っているように、アメリカ農業に触発される。アメリカ農業に影響を受けた津田の提

案で、派遣団とサンフランシスコの種苗商との間で、アメリカの葡萄などの果物類および穀物や野菜類の種子と、日本の種子との交換、そしてアメリカの葡萄の苗 5,000 本の購入などを約束している¹⁸⁾。この契約に基づき、種苗類は翌 1868 (明治元) 年に農書などとともに、日本に送られてくる。しかしこの時点ではすでに幕府が瓦解していたために、日本の種子はアメリカへ送られたものの、アメリカの種苗類の購入代金のほうは支払われなかった。しかし明治新政府が 1871 (明治 4) 年になって、ようやく代金約 2,000 ドルを支払っている¹⁹⁾。このように津田はアメリカ視察を通して、農業に関心をもったものの、未だキリスト教との関係は鮮明なものではない。

3 農業実践の端緒

アメリカ派遣から帰国後、1867 (慶応 3) 年に幕府は新潟を開港することに決定したので、津田は新潟奉行に転役して、通弁・翻訳御用に就く。この時、津田は英語教授方にも就く。その後、戊辰戦争で津田は幕府側として越後へ出向くが、敗れて長崎で一旦過ごした後、東京へ戻っている。明治維新の後に、津田は官職を辞して失職する。しかし英語力を生かして 1869 (明治 2) 年に築地ホテル (当時の東京で、外国人を対象とした唯一のホテル) に勤める。このホテル勤務の時に、津田は外国人の食事には、必ず新鮮な野菜が必要であることを知る。そこで自ら西洋野菜の栽培などを手がけている。津田が農業を実践した最初である²⁰⁾。

明治政府も農業振興に対して無関心であったわけではない。殖産興業政策の一環として、1870 (明治 3) 年に民部省に勸農局 (翌年には大蔵省に移管して勸農寮と改称) を設置している。勸農局は全国の荒地を開拓して、桑・茶・葡萄などを植えて、生糸や茶などの輸出の増加を図り、新たに葡萄酒の製造を試みて、輸出産業として育成するという試みに着手する。民部省は窮民対策として開墾政策に力を入れているが、緊急な治安維持という目的をもっていたために、事業は計画通りに進まなかった²¹⁾。民部省自体も廃藩置県による機構改革にもなって廃止される。

津田は 1871 (明治 4) 年に築地ホテルを辞めて、野菜の栽培に本格的に取りかかる²²⁾。当時、幕藩体制の崩壊後、江戸では多くの武家屋敷が空き家となっていたので、江戸市中に野菜栽培地を求めることは比較的容易であり、津田は麻布に土地を購入している。明治初期の江戸は空き地で農産物、とくに貿易収入を得るために桑と茶の栽培が盛んに行なわれ、その一大産地を形成していた²³⁾。

一方、明治政府は 1871 (明治 4) 年に北海道開拓使を設立する。北海道開拓使は同年に開拓使官園を東京の青山と麻布に設置して、主として果樹を栽培する²⁴⁾。津田は野菜栽培の経験を買われて開拓使嘱託となり、その傍ら野菜栽培に従事する。外国から種子を取り寄せ、野菜の試植をしている。しかし種子を取り寄せても、どのような形状の収穫物になるのか見当がつかなかったようである。たとえばアスパラガスでは、収穫物と缶詰製品との違いがわからず、アメリカ大使館や公使館に問い合わせている。また在来農作物と輸入農作物との名称の違いがわからず、輸入農作物を取り寄せてみて初

めて、同一の作物か異なる作物かがわかったようである。たとえば、エッグ・プラント (egg plant) をそのまま「鶏卵草」と翻訳したが、現物を見てナスであることが判明したということもあった。津田は野菜のほかにも果樹の栽培も手掛けている。たとえば、1871 (明治4) 年頃に横浜在住で、北ドイツ連邦総領事ブランド (Max August Scipio von Brandt, 1835-1920)²⁵⁾ から、西洋リンゴの苗木の提供を受け、栽培に成功している。これは西洋リンゴの日本初の品種として、「黄随円」と名付けられた²⁶⁾。

津田が関わった北海道開拓使でも農業振興の動きがある。開拓次官の黒田清隆 (1840-1900、以下は黒田) が、開拓事業調査のため 1871 (明治4) 年に欧米で農業視察を行なう。黒田はその年内に帰国し、その際アメリカ農業局長のケプロン (Horace Capron, 1804-1885) をともなっていた²⁷⁾。ケプロンには開拓使の最高顧問への就任を要請する。このときの歓迎会に津田が同席している。この時の様子について、

先づ主役たる三条公が歓迎の辞を陳べ、之に対しケプロン將軍は一行に代り、今回遠く招聘に応じた挨拶をなし、自今責任を以て事務に当らんことを言っている。(中略) 何せ、仙は通訳というだけのものでもなかったので、持論の農業教育を話題に上せ、側から学者肌のアンチセルの質疑が起り、之には將軍も、黒田清隆も嘴を容れ、木戸は大いに乗気となり、農業のみか、我が国の女子にも大刷新を施すべきを痛感し、大隈参事も双手をあげて必要を陳べたに相違ない²⁸⁾。

と記されている。通訳として出席した津田は、農業に関心をもっていたので会話が弾んだようである。引用文中のアンチセル (Thomas Antisell, 1817-1892) とは、ケプロンが北海道開拓使技師としてともなってきた化学の専門家のことである。アンチセルは土壌や鉱物の分析を専門としていたので、開拓使仮学校の地質鉱山舎密長および同校の教頭に任命される。

北海道開拓使では、女子教育にも関心のあった黒田が、政府の派遣する岩倉使節団に女子留学生の随行を企画する。津田の娘梅子は、それに応募している。梅子は 1871 (明治4) 年に渡米し、約 11 年間のアメリカでの就学を終えて、1882 (明治15) 年に帰国する。滞米中はワシントンから約 8 キロ離れたジョージタウンで、日本公使館書記官であったランメン (Charles Lammen)²⁹⁾ 宅に寄宿している。津田は梅子の縁で、ランメンへ柿の苗木を送っている。ランメンはアメリカ農務局に結実した柿を持ち込んだために、アメリカ農務局から津田に対して、苗木を送るよう依頼がある。アメリカではこの後、この柿は「ツダ」とよばれて、優秀な柿の品種として推奨される³⁰⁾。

梅子のほうは、アメリカでの修学課程は、ジョージタウンにあったカレッジエート・インスティテュート (Collegiate Institute) で小学校課程から始める。その後、アーチャー・インスティテュート (Archer Institute) で普通科の課程を修めている。1873 (明治6) 年にキリスト教会で洗礼を受けて、キリスト教徒としての道を歩み始めている。そして、一旦帰国してから後、1889 (明治22) 年から 1892 (明治25) 年まで再渡米し、帰国後、周知のように 1900 (明治33) 年に女子英学塾 (現・津田塾大学) を創設する。津田はアメリカの農業情報を、北海道開拓使や梅子を通じて得ることになるが、

キリスト教に関しては、津田よりも梅子のほうが先に、より直接的に触れる機会をもった。

4 農業情報とキリスト教

津田は岩倉使節団が出発した翌月に開拓使嘱託を辞職して、大蔵省勸農寮に勤め始める³¹⁾。大蔵省勸農寮は、民部省勸農局が着手した各種の勸農政策を、1871（明治4）年に引き継いだ。津田にとって勤務先が変わったとはいえ、農業振興に関わる仕事であることに変わりにはなかった。しかし勸農寮も約1ヶ月で辞任して、1873（明治6）年にウィーン万国博覧会（以下はウィーン万博）に派遣されることになり、副総裁の佐野常民（1823-1902、以下は佐野）の書記官となって、現地へ赴く。この事務局の総裁は大隈重信（1838-1922、以下は大隈）であったが、大隈はウィーンに行っていない。ウィーンに派遣されたのは、副総裁の佐野をはじめとして田中芳男（1838-1916、博物学、以下は田中）、古川正雄（1837-1877、慶応義塾初代塾長、以下は古川）ら約70名であった。日本政府の博覧会参加の目的は、「西洋各国の風土物産と学芸の精妙とを看取し、機械妙用の工術をも伝習して勉めて御国学芸進歩物産蕃殖の道路を開き候」³²⁾ということであった。津田は「博覧会三級事務官心得、農具および庭園植物主任兼審査官担当」という肩書きで、それまでの農業経験を生かして、農業や園芸の調査を担当する。

津田はウィーン万博で農機具などの展示をみることによって、先進諸国の農業技術の水準が高いものであることを知る³³⁾。このときは農業の実態を視察するものではなかったが、当時の先端技術をみることによって、触発されることが多かったようである。そのなかでも、滞在中にウィーン在留のオランダ人農学者ホイブレンク（Daniel Hoibrenk）の指導を受けたことは、その後の津田の農業研究や実践に大きな影響を及ぼすことになる。ホイブレンクから主に園芸学についての講義を聞き、実際に農園で伝習を受ける。津田はこの時に麦や葡萄を使って、「媒助法」（後述）の効果を確かめてみたようである。

ウィーン万博の報告書は、1897（明治30）年に田中と平山威信（1854-1929）の共編『澳国博覧会参同記要』として出版される。この報告書において津田は「澳国博覧会農業園芸の伝習および爾後の状況」を記述する。しかし津田はこの報告だけではなく、帰国直後の1874（明治7）年1月に、ホイブレンクから学んだことをまとめて『農業三事』（稿本）と上申書「農業三事を奉る書」を、当時の内閣総理大臣である大隈に提出している。『農業三事』はホイブレンクによる“*Method of Cultivation, explained by three different process*”の口述記録を編集したものであった。『農業三事』は上下二巻にわたり、1874（明治7）年5月に東京と大阪で刊行される。

『農業三事』の「三事」は、第一が「アトモスフィリック、パイプ」（気筒と言う義、「気筒」）であり、第二が「インクリネー」（樹枝を曲る義、「偃曲」）であり、第三が「アルチフィシアル、ヘコテーション」（人工を以て豊熟せしむるの義、「媒助」）である。第一は筒を地中へ入れ、大気を地中に吸入

することによって地質を高め、植物の生育を高める方法である。第二は枝を曲げることによって、幹の養分吸収を高めたくする方法である。第三は人工的に授粉量を多くして、収穫量を増加させるという方法である³⁴⁾。これら三つの方法は、現在の用語に置き換えれば、第一が暗渠通気、第二が下方誘引整枝及び麦類踏圧、第三が人工交配となる³⁵⁾。当時は未だ欧米の農業書が日本国内ではほとんどみられなかったので、『農業三事』はかなり普及した。津田によれば、「西洋農事の新知識を普及するのに、大いに貢献」した。これを教科書として採用する小学校もあった。つまり津田の啓蒙活動の原点ともいえるものであった。

津田は『農業三事』の第三の方法を応用して、「津田繩」を考案している。これは毛糸の房を繩の先に付け、そこに蜜を付けたものである。米麦などの作物を適期に震動させると穂が一斉に開花して花粉を噴出するが、この花粉を、蜜を塗った繩に付着させ、確実に授粉をさせるというのが、津田繩のねらいであった。実験結果は、米で5割前後の増収、小麦で場所によって違いがあるものの、2割から4割の増収があったとされる³⁶⁾。

この実験の結果は『朝野新聞』に投稿され、さらに「禾花媒助法之説」として1875（明治8）年に『明六雑誌』（第41号）上で発表される（禾花とは稲の花）³⁷⁾。津田繩は1875（明治8）年に銀座二丁目に販売所が設けられて、全国的な展開が図られる。この様子について初子（津田の妻）は書簡で、

「津田繩」と名付け候農具が出来日本中につかわし候、右キカイは米、麦等たくさんみのらせ候道具に御座候、この機械をこしらへ候は女子にて、女工場を相建、昨今は日に約束千本出来、女工毎日二百人余も通い居り候³⁸⁾。

と娘の梅子に書き送っている。この普及展開を受けて、津田は東京府に対して「禾華媒助法実験地創立、利害得失判決の儀」を申し出ている。しかしこの申し出は政府によって検討され、調査中という理由で拒否される。津田は再度申請したようであるが、政府は欧米6ヶ国に駐在する公使を通じて、欧米の農学者に問い合わせるなど、津田の実験結果の信ぴょう性について調査を重ねる³⁹⁾。

津田繩は全国的に普及したものの、政府・府県・民間で激しい論争があった。内藤新宿試験場の実験結果では、媒助法がそれほど効果のあるものでないことがわかる。さらにお雇い外国人教師ワグネル（Gottfried Wagener, 1831-1892）は、媒助法は効果のないものであるとする報告書を勸業寮長に提出し、さらに書簡（1876年2月10日付）においてホイブレンクの批判などを行なっている⁴⁰⁾。農林省農務局は「当局にては欧米諸国の農学者の意見を徴し、また津田仙の申請により内籐新宿試験場において嚴重なる試験を施行せるも、結局当局としては媒助法の効果はこれに要する経費を償うに足らざるものと認めたるものの如し」⁴¹⁾という結論を出す。媒助法は実験方法が確立されたものではなく、そのうえ採算性を考えると、津田が主張するほどの利点をもたなかった⁴²⁾。そして勸業寮は媒助法の廃棄を指示する⁴³⁾。この結果、津田繩の購買者は急速に減少し、1879（明治12）年以降はほとんど顧みられることがなくなる。

しかし津田の試みは、科学的根拠をもたない効果のないものとして退けられたわけではない。この時の論争は多くの人を巻き込み、農学のあり方を考える上で、大きな意義をもった。後に学農社に在籍した玉利喜造（1856-1931、以下は玉利）は「媒助法の効果良否はおいて問わないが、以来、このため、農家をして学理上農業改良に意を注ぐに至らしめたるや明らかなり」（『農業雑誌』、1900年8月5日、347ページ）と評価する。この媒助法の論争による影響は大きく、これをきっかけに農業改良への関心が高まり、学農社の活動が広く知られるようになる⁴⁴⁾。

ところでウィーン滞在中に津田に影響を与えたのは、農業に関することだけではない。津田はキリスト教が住民の生活に深く浸透していることを知り、キリスト教に大きな関心をもつ。津田はこの時の感想を、

私はもとより、農業に関する事柄を調査すべきであったが、大博覧会場にて最も意外に感じたのは、ヤソ教の経典とも言うべき、バイブルの多く陳列されていたことであった。余の記憶にては少なくとも二百五十か国余の国語に翻訳せられしものあり。そこで私はヤソ教はどうしてこんなに盛んに世界に行なわれているのであろう、(中略)疑問百出、とかくの判断に迷うのであった。(中略)その頃、日本にも耶蘇教が段々広まってゆく評判を新聞紙などで知っていたので、これは早晚、わが国にも西洋文明と共に、この宗旨もまた行なわれる様になるのであろうが、それにしても、日本のためには天主教か、またプロテスタント教か、はたしていずれが最も利益するかさぶる判断に苦しんだ。顧みて、この天主教の盛んなウィーンの風俗いかにとすると、なかなか不道德の事柄が少くない。ところがかのプロテスタント教の行なわるる英国と云い、米国と云い、はたまたドイツと云い、国運隆々として日進月歩の勢あり、これに引き替え、かの天主教の行われる諸国はイスパニヤと云い、ポルトガルと云い、其他僅かにフランスを除くほかは、おおかたには微々として振わない。ゆえに私もまた、この教を奉ずるとしても、よくバイブルを研究してプロテスタントに入らなければと決心して帰朝した⁴⁵⁾。

と語る。津田はキリスト教に関心をもつと同時に、この宗教には天主教（カトリック）とプロテスタントとの二つがあることを知る。そしてプロテスタントのほうがイギリスやドイツなど国家の隆盛と大きく関わっているとみて、それを高く評価している。

前述のように、津田がキリスト教を初めて知ったのはウィーン万博の時ではなく、それ以前であった。しかしながらそれは単にそのような宗教があるという程度のもので、キリスト教の流れや社会生活との関連などについては、ほとんど理解していなかった。しかも津田はウィーンで経験するまでは、キリスト教を文明開化の精神と漠然と同一視していたので、それが文明開化の精神とは異なる原理に基づいているという認識はなかった。ウィーンでの経験を通して、キリスト教が、とくにプロテスタントが社会生活や農業に大きな影響を与えているのではないかと考えるようになる。

ところで当時の明治政府のキリスト教に関する対応は、主に欧米文明の導入の一環としてとらえて

いたので、それを拒むという姿勢はなかった。明治政府は1873（明治6）年に太政官布告第68号によって、キリスト教の信仰を許可している。この状況下で、たとえばイギリスの福音伝道会（Society for the propagation of the Gospel）、アメリカのメソジスト監督派教会（American Methodist Episcopal Church）、カナダのメソジスト教会（Methodist Church of Canada）の宣教師が来日して、布教活動を始めている。ちなみに津田が後に洗礼を受けるのは、アメリカのメソジスト監督派教会のソーパー（Julius Soper, 1845-1937）であった。プロテスタント系の多くが流入し、日本での布教活動を行なうようになる。津田がウィーンで感じたように、経済や社会、そして農業や教育に対して大きな影響力をもつ宗教が日本に流入する。明治政府は、このキリスト教の布教活動を欧化導入のきっかけととらえ、キリスト教（プロテスタント）の教会に接近していた。つまり津田がプロテスタントに対して抱いた感覚と同様であったといえる。

5 学農社の設立と農学校

津田は1875（明治8）年に、山本亮吉、林賢徳（1838-1914）、由布御季、三沼幹実（『稲麦媒助法』の編者）、堤幹巳、桂権吾、吉田忠太郎らとともに、農業（関連）事業を展開する組織づくりを考える。そして麻布の津田宅において、農産物の栽培・販売（とくに種苗）・輸入、農業に関する書籍・雑誌の出版などを主な事業とする「学農社」を設立する。学農社には同年に二木政佑と野沢勝太郎、そして翌1876（明治9）年に十文字信介（1852-1908、以下は十文字）、渡辺讓三郎、平山武和が加わる。

学農社の設立のきっかけについて、後に津田は、

余は微力を以て新農業普及に貢献する所あらんと慾して、多少劃策するところありし間、政府は北海道開拓の事業を始めとし、全国に新農業を施設するに銳意に、其功業に著大なるものありしことは、亦多言を要せざる所、予は維新の後、士職を擲った、自ら進んで武士の賤めたる農業に身を投じ、以て我国農業改革の先駆たらんことを覚悟し、爾来、数十年、回顧すれば失敗多くして成績に乏しきを嘆ず、去れど今日に及んで我国農業の進歩と、農民の地位の發達とを見るを得たるは、即ち、予が少年の志の他を俟て大ひ成れるものにして、老余の満足何者か之に若かんや（『農業雑誌』、第1020号、1908年、213ページ）。

と回顧している。学農社は新しい形態の農業について、先駆的な事業を試みるというのが趣旨であった。しかしながら学農社の維持という点については、家畜場、試験場、その他の事業に関する費用が多額にのぼり、当初から維持管理は困難であったようである。

多額の経費がかかるとはいえ、学農社では農業発展に資するために、人材育成も重要な事業であると位置付け、事業の一環として農学校を併設する。農学校の設立は1876（明治9）年であるので、札幌農学校設立の1年前にあたり、わが国の農学校の先駆をなすものであった。わが国では明治10年代に各地で農学校が設立されるが、学農社農学校は最も早く設立された農学校のひとつであった（表-

表-1 明治初期の農学校（明治15年現在）

公私別	学校名	所在地	創立	年限	授業日数	教員数	生徒数
公立	新潟勸農場	新潟	明治8	3	252	4	19
	農業伝習所	石川	明治10	3	254	9	43
	岐阜農学校	岐阜	明治11	4	244	9	36
	農学校	広島	明治12	3	209	5	32
	福岡農学校	福岡	明治13	3	252	7	38
	郡山農学校	福島	明治13	3	251	3	22
	農学校	鳥取	明治14	2	264	1	19
	農事講習所	山梨	明治15	3	216	3	15
私立	学農社	東京	明治9	5	252	8	80
	獣医学校	東京	明治14	3	268	3	13
	大張野学校	秋田	明治14	2	210	1	12

出所：金文吉『津田仙と朝鮮—朝鮮キリスト教受容と新農業政策』、世界思想社、2003年、61ページ。

1)。当時、学農社農学校は福沢の慶應義塾、中村の同人社、尺の共立学舎（英学塾）と並んで、四大私立学校のひとつとされた。

農学校で教鞭をとったのは、上野栄三郎（後に実業家、津田の長女である琴子と結婚）、杉田（元良）勇次郎（1858-1912、後に東京帝国大学心理学教授、以下は杉田）、中島力造（1858-1918、後に東京帝国大学倫理学教授）、中川久和、海部忠蔵（後に普連土女学校校長、以下は海部）、さらに岡田松生（1858-1939、後に熊本県県会議員）、小崎弘道（1856-1938、後に同志社第2代社長）、山本亮吉、渡辺謙三郎らであった⁴⁶⁾。内村鑑三（1861-1930、以下は内村）も北海道から上京した1884（明治17）年の6月から10月まで、物理学（動物学）の講師をつとめている。

一方、学生は池田作次郎（後に第七高等学校教授）、巖本善治（1863-1942、以下は巖本）、宇喜多秀穂（後に学農社社長、以下は宇喜多）、高千穂宣麿（1865-1950、昆虫学）、立花寛治（1857-1929、以下は立花）、田中宏（1859-1933、後に獣医学博士）、玉利（後に盛岡高等農林学校校長）、豊永真里（後に東京帝国大学教授）、新原俊秀（1859-？後に女学校校長）、福羽逸人（1856-1921、後に官営播州葡萄園園長、以下は福羽）、十文字（後に『農業雑報』を創刊）、三田義正（1861-1935、後に貴族院議員）、山田登代太郎（後に京都高等蚕糸学校校長）らであった（『農業雑誌』、1880年8月7日、402ページ）⁴⁷⁾。主に農業界と教育界に携わることになる人材を輩出する。たとえば大名華族であった立花は、後に柳川において立花農事試験場を開設している⁴⁸⁾。巖本は卒業後も農学校にとどまって、津田の協力者となり、後に明治女学校（1885年から1909年まで存続）の校長となる。明治女学校は梅子が、高等科で英語教師を勤めたことがあり、その関係で巖本は梅子が津田塾を創立する時の協力者となっている。

学農社農学校の学生数は、年を追うごとに増加し、1877（明治10）年は53名、78年は70名、79年は145名、80年は167名、81年は175名となる^{49）}。しかし1881（明治14）年が学生数のピークで、それ以後、減少し始める。1882（明治15）年は一挙に80名に減少し、それ以後、83年は43名、84年は25名となる。結局、1884（明治17）年度が農学校の最終年度となってしまう^{50）}。学農社農学校は約8年間しか存続しなかった。

一方、当時の明治政府による農学校の設立も、他の農学校の設立と並行して進んでいる。1874（明治7）年頃から農業指導者養成機関として農事修学場の設立を検討して、1877（明治10）年に内務省勸業寮が駒場に農事修学場を設立している。その講師にはイギリスからお雇い外国人教師を招聘している^{51）}。農事修学場は翌1878（明治11）年に官立駒場農学校（現・東京大学農学部）と改称する。この設立にともない、福羽や玉利らが学農社農学校をやめて駒場農学校へ移っている。玉利の回顧によれば、授業料が無料であったからである。この時、宇喜多は学農社農学校に残っている。

津田は校則にあたる「成規」を設けて、学農社農学校の目的について、

今ここに農学校を設けた所以のものは他なし、専ら泰西の農書を講究し、本邦の農業と折衷して、広く天下の鴻益こうえきをはかり、国家の富強の基を固うせんと慾す。有志の輩、幸に来学せよ^{52）}。

と訴える。農学校は教室と学生寮、そして実験場が設けられる。修学年限は予科2年、本科3年、別科2年とされた。学科目は、主に当時の邦語農書の講読、外国農書の翻訳書の講読、算術などであり、とくに農業実習は必須科目とされた。農学校では1879（明治12）年に最初の卒業式が挙行されるが、その卒業証書には修得科目が記されている。たとえば「普通英学、博物学、植物性理学、蔬菜栽培法、果実培養法、普通農学、家禽飼育法、牧牛術、牧馬術、牧羊術、農業化学、農業経済学、右学科卒業候事」^{53）} というように記された。

当時の農学校の様子について、学生であった巖本は、

津田先生は果実書とか牧畜書とかを持って出られ、原書からすぐに翻訳しつつ教えられたもので、私共はエライ英学者だと恐れ入っておったものだ。毎週、討論会がある。演説会がある。毎日肥やし桶を担いだ（中略）。その頃農務局長であった松方侯はおりおり来校して落ち着き払って演説された。伊藤公のおとっちゃんは身軽で質素で評判のものであった。開拓使と『開拓雑誌』の関係で、故黒田伯はもっとも親密なもので、しきりと豪傑談があった（『農業雑誌』、1907年10月15日号、452ページ）。

と回想している。松方正義（1835-1924）、伊藤博文（1841-1909）、黒田らの明治の元勳が相次いで来校して講演をしている。また同じ学生であった新原は、

米国の農学を研究する事が専門で、書物等もすべて米国から取寄せて学んだ。文法や歴史等も少しはあったが、農学が主だったので、ただ英語の文字さえ読む事が出来ればよいという変則な勉強をしたため、会話等是一向出来なかった^{54）}。

と回想している。学農社農学校も、明治期日本の高等教育における一般的な傾向と同様に、欧米技術を性急に学ぼうとする姿勢に変わりはなかったようである。

しかし津田の教育姿勢は、啓蒙ということで一貫している。教育方法論については「言語は我思想を他人に知らしむ者にて、文字は其言語を写す器械なり、然れば此器械は成べく簡便にして何人にも分り易き者を撰むべきこと肝要なり」としていた。さらに「想うに學術は成るべく高尚の点に進め度きこと勿論なれど、之を衆人に示教する文字は成るべく簡便にして分り易きやう致したき者なり」（『農業雑誌』、第236号、1886年、5ページ）と述べている。津田は啓蒙という姿勢で臨んでいるので、難しい学術的な原理をできるだけ平易にし、簡明な言語によって知識を伝え、農山漁村の振興の助けとなるように考えていたようである。

しかし学農社農学校は、単に先駆的な農業教育を施す場だけではなく、その指導方針にキリスト教を取り入れている点に大きな特徴があった。キリスト教の「道徳、宗教の精神を鼓吹」して「確實有徳なる人物を養成」しようとした。農学校ではキリスト教の集会を開き、オランダの宣教師フルベッキ（Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830-1898）、アメリカの宣教師ソーパーらを招いて、キリスト教の講話を行なった。これによって学生の多くはキリスト教に関心をもち、卒業生の約90パーセントがキリスト教徒となった。津田の掲げる人材育成にキリスト教は不可欠のものであった。

学農社農学校設立の精神に取り入れられたキリスト教であったが、これを取り巻く状況は決して歓迎するというものではなかった。太政官令が廃止されて、神道と仏教が混同状態におかれたために、宗教をめぐる状況が混乱していた。そのなかでキリスト教の布教を目的とする欧米人は警戒される。当然、欧米人の出入りする学農社農学校は警戒の対象となっていた。ソーパーらの来校日は必ず巡査による農学校内の巡回があった（『農業雑誌』、第1020号、1908年、112ページ）。学農社農学校が短命であったのは、経費という面が確かにあったものの、キリスト教を取り巻く状況が厳しいことも影響を与えていた。しかし状況が厳しいものであったにもかかわらず、津田はキリスト教を農学校の建学の精神として取り入れていた。津田にとってキリスト教は、実際の農業に生かしていくべきものであると同時に、有徳なる人物の養成にとって必要欠くべからざるものと考えられていたからである。

さらにキリスト教によって、津田がめざしたのは、有徳な人物の養成と同時に、営利追求的な経済人として自立する農民をつくり出すことでもあった。日本農業の実態をつぶさにみることがなく、欧米の農業に触発された津田にとって、地租改正や地主小作問題の改善などは、当面の問題とはならない。この点で津田にとって、いわゆる農業問題を解決することが目標にはならない。津田が目標とするのは、伝統と偏見を打ち破って、農民が営利のない合理的な経済生活を営むようになることである。津田は地租改正や地主小作問題も、農民が営利性を自覚することによって解消されると考えている。そして営利性の自覚は、津田によればキリスト教によって導かれる。ここにキリスト教を農業に積極的に導入する意義があるとしている。

結局、津田の目的は「農業者自身の自主的活動によって、農業の近代化を実現せしめようとした」⁵⁵⁾ ことにあった。しかしながら、この目的はあくまでも欧米農業をモデルにした考え方であり、日本農業の実情に適合するのかどうかは不明であった。その後、津田によって行なわれた様々な事業（後述）は、津田の描く理想の姿と現実の姿との葛藤の歩みであったといえる。葛藤が続いたとはいえ、津田は一貫した立場をとり続ける。それは、政府が農民を合理的な農業経営者とみていないことを批判し、政府が主導して農業発展を図ろうとする農業界の官僚化の傾向に対する批判であった⁵⁶⁾。

たとえば、この津田の姿勢は農会に関する論説において、最もよく表されている。津田は農会という全国にまたがる組織に関して、

人或は我国にも既に皇族を推戴するの堂々たる大日本農会あり、其会員の数は五千を超ゆ、故に恐らくは欧米の農会に愧ぢざるべしと我輩は実に大日本農会のあるをしれり、(中略) 此大日本農会の性質を見れば、不幸にして素と民間農事熱心家が奮って之を設立し之を維持するものに非ざるなり、即ち之が創立者は農商務省の官吏なり、其役員となりて事務を主宰する者も官吏なり、又其事務を扱う所の顔触れを見れば、貴顕若しくは府県知事の如き人物なり、斯の如く其設立の初めよりして実業に従事する所の熱心家より成りたる者に非ず、(中略) 万事御役所風の農会は實際農業に左までの益をなすべしと思わざれば我輩之を賛成する能わざる所以なり⁵⁷⁾。

と訴える。役所が主導している農会は、津田によれば「自立」していないことになり、それは農業の近代化、つまり農業発展の道にはつながらないものとなる。

農会の組織化は、明治政府が豪農層や篤農家などが民間政党と結び付くことを嫌い、官僚組織に結び付けておこうとする意図をもってなされた。津田は、こういった農政における官僚化を厳しく批判し、そういった傾向に対抗する意識をもった。そして意識の高い地方の豪農層や篤農家などが、その津田の考えに共鳴するという構図がつくられていくことになる。

農会とは異なるが、他に津田が参加した、農業振興を目的とする組織が結成されている。それは1878（明治11）年の駒場農学校設立とほぼ同時に結成された「万年会」という組織である。万年会は渡辺洪基（1847-1901、以下は渡辺）が中心になって「日本の対外貿易赤字解消のため、渡辺が在来農法の改良による農畜産業を育成し、殖産興業を振興する目的で創設」⁵⁸⁾ された組織であった。この趣旨は学農社の理念と類似であり、津田は万年会の幹事となっている。しかし結成の翌1879（明治12）年には幹事会によって当初の規則が改正され、地方を軽視する組織となってしまう⁵⁹⁾。地方の農村に対して積極的な啓蒙活動を行なっていこうとする津田の姿勢と相反するものとなる。したがって元々の理念は類似であったとはいえ、万年会の活動に対して津田は徐々に消極的な姿勢をとっていく。

6 農業技術の普及—『農業雑誌』の刊行

津田は啓蒙を重視したので、その著作活動は活発であった。主なものを年代順に追うと、

- 1877 (明治 10) 年 戸田五郎『骨粉説要』(粉骨舎)の校閲
 1879 (明治 12) 年 十文字信介と共訳『農業新書』全五冊(学農社)
 1880 (明治 13) 年 山田亨次と共著『製糖新説』(学農社雑誌局)
 1887 (明治 20) 年 論文「田圃の区別」(梅田君蔵編『明治大家論集』法蔵館)
 1888 (明治 21) 年 「緒言」、論文「桑の種類および栽培の改良」(津田仙編『桑樹談話会報告』学農社)、磯村貞吉『小笠原島要覧』(便益舎)の校閲
 1889 (明治 22) 年 編『都鄙秋興』(出版社不明)
 1892 (明治 25) 年 編訳『果実栽培』第一篇(学農社)
 1896 (明治 29) 年 横山久四郎と共著『輸入作物栽培新書 付・除虫菊の培養』(学農社)

である。これらの著書および編訳書では、主に農業技術の改良、果樹・園芸・養蚕業を中心とする畑作物、さらに特産品や輸入作物の育成に関することが記述されている。しかし当時の農業問題としてよく議論されていた地主小作関係については、ほとんど触れられていない。主に農業技術論の説明、とくに欧米の技術導入に熱心な津田の限界ともいえる側面である。

学農社は 1876 (明治 9) 年 1 月に機関誌『農業雑誌』の創刊号を発行する⁶⁰⁾。ほぼ月 2 回のペースで刊行されたが、雑誌のページ数は徐々に増え、20～40 ページとなる。津田は『農業雑誌』の刊行に至った動機について、

今や我国各国トノ貿易日ニ益々盛大ナラントスルモ、輸出ハ常々輸入ヲ償ワズ、日々我レ二百円余ノ損失アルヲ聞ク、苟クモ愛国ノ志情アルモノ、此ノ輸出入ノ不償ヲ救フハ人智ヲ進メ物産ヲ増シ、且ツ通商航海ノ術ヲ盛ニスルニ在リト、而シテ我が農ヲ以テ国ヲ立ツ、日本ニ於テ最要ナル農学ニ至テハ、或ハ日ク鄙事ナリ日ク賤業ナリト、之ヲ講研スルノ有志実ニ稀ナリ、呼何ゾ時務ヲ知ラズ時事ヲ弁ゼザルノ甚シキヤ (『農業雑誌』、創刊号、1876 年、1 ページ)。

と記している。日本の国際収支の不均衡を是正するには、輸出農産物の増加が必要であり、そのためには農学の進展が不可欠であると語っている。

『農業雑誌』の内容は、農業に関する学理、その実際的な応用、農業全般、農業の観点から議会政治に対する批評などにも及んだ。とくに新知識の普及ということで、アメリカ農業に関する報告の翻訳や紹介などが掲載された。津田はこの雑誌の巻頭言にジョージ・ワシントン (George Washington, 1732-1799) の “Agriculture is the most healthful, most useful and most noble employment of man” (農者、人民職業中、最健全、最尊貴、而最有益者也) を掲げて、学農社の「標語」としている。

雑誌の発行部数は、毎号 3,000～4,000 部であった。当時、雑誌類は回覧して読まれることが多かったので、発行部数よりも実際の読者数は多いと想定される。また『農業雑誌』に掲載された論文が、新聞に転載されることもあったので、さらに広範に読者を獲得していた。主な読者をあげれば、福島県須賀川で多角経営や大農法に取り組んだ橋本伝右衛門 (1845-1900)、群馬県で深泥田を二毛作田に

変えた武藤幸逸（1838-1914、共農舎を創設）、群馬県安中のキリスト教社会運動家の湯浅治郎（1850-1932）、神奈川県で温室作りに取り組んだ相沢菊太郎（1866-1962）⁶¹⁾、大日本報徳社の社長となる静岡県の岡田良一郎（1839-1915）、福岡県二川村で害虫駆除に功績のあった益田素平（1843-1903）、熊本県で徳富蘇峰（1863-1957）や蘆花（1868-1927）の父である徳富一敬（1822-1914、以下は徳富）、熊本県の日進堂館長の竹崎茶堂（1812-1877）らであった。これらの読者の多くは、一般的に中農以上の階層の農業従事者であり、新農法の担い手であった⁶²⁾。

とくに徳富は雑誌の購読だけでなく、学農社から新しい種子や苗を購入していたようである。蘆花は「父は津田仙さんの農業三事や農業雑誌の読者で、出京の節は学農社からユーカー、アカシヤ、カタルバ、^{しんじゅ}神樹などの苗を仕入れて帰り、其他種々の水瓜、^{まとうきび}甘蔗など標本的に試作した」⁶³⁾と、学農社の先進的な取り組みと、それに呼応するかのような徳富の行動を記述している。

津田は1876（明治9）年1月の創刊号から第13号（7月上半期）まで、毎号の巻頭論文を執筆している。たとえば「茶の話」（第2号）、「魚類媒助（養殖）法」（第3号）、「葡萄樹挿木の説」（第4号）、「羊の話」（第5号）、「玉蜀黍の説」（第7号）などである。とくにトウモロコシについては、「日常の食糧となすに最も可なるもの」であると記して、一粒の種子で多くの収穫が期待でき、健康にも良いと唱えていた。

津田はこの論考発表にあわせて、1876（明治9）年からアメリカ産トウモロコシの種子の通信販売（以下は通販）を始めている。これが日本で最初の通販であった⁶⁴⁾。この年は、日本の郵便制度が創設された1871（明治4）年から、わずか5年後であった。さらにアメリカ通販大手のモンゴメリー・ワード社（IT化の進展で、新しい情報管理システムの構築が遅れ、1997年に倒産に追い込まれる）が通販会社を設立した1872（明治5）年から、わずか4年後のことであった。通販は農業技術そのものではないが、欧米の農業技術普及の延長上にあるものであった。

アメリカやイギリスの通販をみた場合に、当初の取扱商品が「種苗」であったという共通点をもつ。この点で津田の試みは、アメリカやイギリスと共通点があった。しかしながら、その後の展開は大きく異なっていた。これらの国では、いずれも「悪徳業者」による不良品（種苗のなかに粗悪な種苗を混ぜたもの）の販売があった。しかしながら、たとえばイギリスの場合では、農業協会（agricultural society）を設立して、不良品のチェックを組織的に行なっている⁶⁵⁾。これに対して日本では、そういったチェックを行なうことはなく、農民の信頼を失っていくことになり、1900年代に入ると通販は次第に衰退していった。

通販は当時の日本では新機軸であったが、津田が試みた後は、日本社会に定着しなかった。とくに通販の発祥地ともいべきアメリカと比べて、日本には通販専門の企業は育たなかった。アメリカでは広大な国土において、開拓期の農村生活にとってなくてはならない雑貨などの必需品を提供したことをきっかけにしている⁶⁶⁾。これに比べて日本では、アメリカ産トウモロコシの種子は、当時の日本

農業にとっては「思いがけない」新製品であったのかもしれないが、日常生活に根ざしたものではなかった。日本の通販は、津田が先駆的に始めたが、それは日常生活に立脚したものではなかったために、津田以後は単に「物珍しさ」を追いかけることになってしまう⁶⁷⁾。したがって日本の通販は、一時の流行を起こすことは可能であっても、生活の一部として定着するには、かなりの時間を必要とした。もっとも日本では種苗と並んで、日用品の緑茶が通販の商品として拡大したことがあった。とくに1910年代は宇治茶の通販が流行した。しかしながら宇治茶も粗悪品が現れて、種苗と同様、衰退していった⁶⁸⁾。

津田は1902（明治35）年に『農業雑誌』が第800号の刊行をむかえたとき、雑誌の発刊に至るまでの経緯とその目的、その後の農業技術の普及について回顧している。津田は、

余は独り少数者と共に農学の研鑽をなすを以て満足する能はず、研究の成績を治く農業に知らしめ、又農業の鄙事にあらずして国富の基本たることを覚らしめんとして、更に本誌を発刊したるなり、爾来孜々として時勢の進歩と共に農民の知識を高め、農法の改善を図り、農業の尊貴なる所以を反覆説述しつつあり、幸にして余の希望卒旁空しからず、今や農業教育は殆ど全国に普及し、農業補習学校、農事講習所、府県農業学校を始め、農科大学等の設備略ぼ完きに至り、年々幾百の卒業生を出し尚ほ短期農事講習の方法を設けて、一般実地農家の教導をなしつつあり。又肥培耕耘の術に就ては農事試験場設けありて之が改善を務め、着々その実効をあげつつあり、又大日本農会を初め、府県郡農会等系統的に組織せられ、農業全般の進歩を謀るの機関亦成れり、今日の有様を以て本誌創刊当時の状態を較ぶれば、其の塵面壤も啻ならず、余は喜悅極まって語の出づる所を知らざる也（『農業雑誌』、第800号、1902年）。

と記している。

『農業雑誌』は1920（大正9）年7月（第1221号）まで刊行され、比較的長く続いた雑誌である⁶⁹⁾。しかしながらその発行を推進した学農社農学校は、すでに1883（明治16）年12月に廃校が決まっていた。前述のように翌1884（明治17）年度にその幕を閉じる。学農社農学校は欧米農学を導入する先駆的な役割を担ったものの、その事業負担の大きさから、民間で維持していくことが困難となった。こうして欧米農学の本格的な導入については、1878（明治11）年に設立の駒場農学校に譲ることになる。学農社農学校は欧米農学の知識の導入という役割を終えたといえる。学農社の教師をしていた海部の回想によれば、津田は海部に対して内務省勸農局への就職を斡旋し、また学農社に在籍する学生に対して、官立の駒場農学校に転学することを奨励している⁷⁰⁾。しかし学農社農学校の廃校によって、津田の啓蒙活動が終わったわけではない。

政府の方針もまた、当初の殖産興業の転換期にあった。1880（明治13）年に工場払下げ規則を公布し、翌81（明治14）年には農商務省を設置している。農業についても、洋式農具による大農経営や新種苗の普及をめざす勸農政策から、労働集約的な小農経営重視政策へと切り替えられていった。また

これをきっかけにして、政府援助のもとに農業団体の育成が図られる⁷¹⁾。したがって津田がそれまでめざしてきた欧米農学の積極的な導入による先進的な農業形態の普及は、政府による農業政策の方向性と徐々に離れていく。たとえば、津田は1888（明治21）年に『農業雑誌』において米作偏重を排して、商業的農業の拡大を強調している（津田仙「世の豪農有志家諸氏に告ぐ」）。政府の推進する米作偏重ともいえる政策を非難し、これと同時並行的に起こる農業の官僚化を批判している。

もっともその後の『農業雑誌』において、津田の論調が一貫していたわけではない。1884（明治17）年から1887（明治20）年頃まで、巖本が津田の後を受け、『農業雑誌』の主筆として活躍する。巖本は津田とは異なり、地主小作関係に注目し、それが農業の発達を妨げていると考え、全国的な小作慣行調査を行なっている。津田は地主小作関係については関心をもつことがなかったが、巖本が主筆となった後に、『農業雑誌』上で論じられるようになる。地主小作問題に関心を向けるようになった理由は、津田がキリスト教の精神を掲げ、農民が営利的ないし合理的な経済生活を営むことを目標に掲げていたという点から、その意思を継いだということであった。

7 農業技術の定着—地域特産品の形成

『農業雑誌』には、津田の執筆した論文が数多く掲載される。「糖菜（砂糖大根）より砂糖を製する法」「蕃茄とまとの説」（第17号）、「豚の説」（第19号）、「葡萄酒並びに三鞭シヤンパン醸造法」（第20号）、「良種の葡萄樹を速やかに増やす法」（第22号）などである。これらの津田の論文をはじめとして『農業雑誌』に掲載された論文をきっかけに、地域の特産品が生まれる。『農業雑誌』の役割は欧米の農業技術の普及であったので、その技術が地域に定着したということである。たとえば1877（明治10）年3月15日号に掲載されたレオン・ゼッタットの「甲州葡萄の説」は、山梨県勝沼が葡萄産地となるきっかけを与えた。津田は『農業雑誌』に自ら論文を執筆しているように、当初から葡萄の栽培や葡萄酒の製造には関心をもっていた。

山梨県で最初に葡萄酒の製造に着手したのは、甲府の山田ひろのり宥教（以下は山田）と詫間憲久（以下は詫間）の二人の民間人であった。1870年代前半に葡萄酒醸造所を設立して、試醸している⁷²⁾。この二人の取り組みについて、新聞紙上では「内外の人を問わず醸造を心得たる人とさえ言えばその方法を質し、しきりに刻苦勉強しておられました、今般勸業寮と県庁とご協議になり、同寮お雇いにて醸造に詳しき人をお差し向けになり、今秋、詫間氏の邸内において本法の醸造を試みになる由」（『甲府日々新聞』、1876年7月16日付）と伝えられた。この「お雇い」こそ、ゼッタットであった。しかし二人の民間人によって先駆的に始まった葡萄酒製造所は、1877（明治10）年頃には、醸造法や貯蔵法の未熟、販路の狭小などの理由によって閉鎖に追い込まれる。

二人の民間人の後に、葡萄酒の醸造に取り組んだのは、山梨県庁であった。1873（明治6）年に山梨県令の藤村紫朗（1845-1908、以下は藤村）と山梨県権参事の富岡敬明（1822-1909）の二人が、陸

奥宗光（1844-1897）租税頭に勸業授産の方法を具申する。このなかで養蚕や製糸のほかに、葡萄にも言及している。そして1876（明治9）年に県立勸業試験所を設立して、葡萄栽培の研究に取り組み、翌1877（明治10）年には葡萄酒醸造所を設立する（北海道開拓使直営の醸造所が同年に設立されている）。この醸造所にはアメリカから帰国したばかりの勸業寮の大藤松五郎（？-1890、以下は大藤）が招聘されるが、この大藤を支えたのが、地元の豪農の栗原信近（1844-1924、以下は栗原）であった。栗原は山梨県の殖産興業に尽力した人物であり、津田とも親交があった⁷³⁾。津田は栗原に招かれて、葡萄酒醸造技術指導のために甲府を訪れているとされるが、この根拠は今のところ不明である⁷⁴⁾。

山梨県庁の次に葡萄酒製造に取り組んだのは、山梨県祝村（現・勝沼町）の豪農である。1877（明治10）年に雨宮彦兵衛（以下は雨宮）、内田作右衛門、土屋保喬、早川重平らによって、「祝村葡萄酒製造会社」が設立される。この会社は葡萄栽培と葡萄酒醸造法を学ぶために、高野正誠（1852-1923）と土屋龍憲（1859-1940）という二人の人物を、フランスへ派遣している。二人は前田正名（1850-1921）に引率されて渡仏する。この二人が渡仏している間に、地元では高野積成（1846-1909、以下は積成）という人物が、1878（明治11）年に津田から購入した米国産の葡萄苗の栽培に着手する。積成は1880（明治13）年に「興業社」という学農社と類似の組織を設立し、葡萄栽培をはじめとする先進的な農業の普及に努める。もちろん津田とも連携して、津田自身も興業社の社員となり、事業に協力している。また積成は『農業雑誌』（1901年1月5日号）に「和洋葡萄樹條枝剪定広告」を出している。

一方、学農社農学校の学生であった福羽が、1878（明治11）年に祝村の雨宮を訪れている。福羽は当時、学農社を中退して、勸業局試験場の学生として学んでいた。祝村訪問は試験場の命令であったが、津田の紹介でもあった⁷⁵⁾。翌1879（明治12）年に内務省御用係になった福羽は、この時の調査結果を『甲州葡萄栽培法（上）』として出版する。そして福羽は勸農試験場に勤務して葡萄栽培に努め、兵庫県における官営播州葡萄園の設立に貢献することになる⁷⁶⁾。

フランスへ派遣されていた二人が帰国後、祝村葡萄酒製造会社は大日本葡萄酒製造会社へ改編され、それまで葡萄酒製造に関わった藤村県令や栗原らをはじめとして72人が株主となって、本格的な営業活動に入る。津田はこの展開について「近ごろ甲州の某氏が仏国の製法にしたがって葡萄酒を製出し大いに世上の喝采を博した」⁷⁷⁾と記述して、特産品として定着したことを評価している。

葡萄以外にも、地域の特産品の形成があった。1877（明治10）年8月15日号に掲載された「玉葱の説」は、それを讀んだ岸和田の坂口平三郎（1861-1897）が神戸の外国人から玉葱を分けてもらう。そして採種に成功することで、泉州に玉葱栽培が定着した⁷⁸⁾。また読者による『農業雑誌』への投稿が、特産品の形成に貢献した場合もあった。たとえば長野県の東穂高で蚕種を生産していた相馬愛蔵（以下は相馬）がいる。相馬は1894（明治27）年に著書『蚕種製造論』を発表して以来、『農業雑誌』の誌上において、いく度も養蚕業について、その見解を発表して、養蚕業の改良と普及に努めている。福島県の会津で漆樹を栽培していた初瀬川健増、京都で桑樹の改良に着手していた田中敬造らも、同

様に投稿を繰り返している⁷⁹⁾。

このような『農業雑誌』の影響や津田の啓蒙活動は、「農民への学理の導入が、やがて彼等の間に合理的精神を喚起せしめ、前近代的なものへの批判的態度を育成させる」きっかけをもたらすことになる⁸⁰⁾。津田にとって合理的精神の喚起は、欧米農学の導入によって生まれるものであるもので、その背景にはキリスト教精神があった。

8 啓蒙活動と農民の組織化

近代日本の学術展開のなかで、津田が初めて異を唱えたのは、『明六雑誌』の継続をめぐる問題であった。『明六雑誌』には啓蒙的な色彩が強く、この点では『農業雑誌』や津田の活動と類似であった。津田は1874（明治7）年に、前年の1873（明治6）年に創設されていた「明六社」に加入する。明六社は近代日本で最初の啓蒙的学術結社であり、機関誌として『明六雑誌』を発行していた。この雑誌は毎月2回発行され、その部数は平均3,000部であったので、『農業雑誌』と同様、かなりの読者がいたと想定される。『明六雑誌』は当時の啓蒙思想をあらわす唯一の機関誌として、多数の知識人が投稿している。

『明六雑誌』に掲載された論考は、主に財政、政治経済に関する思想的な議論であり、その内容は総合的、百科全書的であった。そのなかで津田の論考も掲載されているが、津田の場合は、直接的に思想性をもつようなものではなく、農学の成果を発表したものであった。つまり直接的にキリスト教について論じたものではなく、新しい農業技術の普及をめざしたものであった。たとえば1875（明治8）年6月16日に「禾花〔稲の花〕媒助法の説」、同年10月1日に「魚培養法〔人工ふ化〕の説」、同年11月1日に「農学の一演説」という題で、明六社で発表している⁸¹⁾。このうち「禾花媒助法之説」は、前述のように機関誌『明六雑誌』の第41号に掲載されている。

明六社は当初の目的を「意見ヲ交換シ知ヲ広メ識ヲ明ニスル」としていたが、徐々にそれから外れていき、政治社会に関する思想などに直接的に言及するようになる。そして自由民権思想に関する議論がさかんに行なわれる。しかし政府によって「改正新聞紙条例取締令」が出され、『明六雑誌』は次第に苦しい立場に追い込まれる。明六社では1876（明治9）年に、『明六雑誌』の継続か停止かをめぐって議論となる。継続を主張したのは、西、津田真道（1829-1903）、阪谷素（1822-1881）、森有礼（1847-1889）らであり、停止を主張したのは、田中不二磨（1845-1909）、辻新次（1842-1915）、加藤弘之（1836-1916）、古川、福沢、西村、中村、そして津田であった⁸²⁾。結局、『明六雑誌』は同年11月の第43号が最終号となり、刊行を停止する。もっとも明六社の集会は、その後も継続している。

津田が刊行の停止を主張したのは、『明六雑誌』のあり方が、当初の明六社の目的である啓蒙活動を大きく外れていることにあった。この停止を主張する論者のなかで、津田をはじめ古川と中村の3名がキリスト教徒であった。古川は慶応義塾の初代塾長であったが、津田と同じソーパーから1875（明

治8)年1月に洗礼を受けていた。中村は『西国立志編』の著者として著名であるが、津田よりも早く1873(明治6)年にカナダ・メソジスト教会の宣教師カクラン(George Cochran, 1834-1901)から洗礼を受けていた。いずれも刊行停止の理由は、津田と同様で、明六社が当初の目的を逸脱してしまっていることを問題視していた。

ところで津田がキリスト教に関心をもったきっかけは、前述のようにウィーン万博のときであった。しかしキリスト教への理解を深めたのは、アメリカ・メソジスト監督派教会の宣教師ソーパーとの出会いからであった。ソーパーは聖書について「熱誠にして率直、あまり邦語に熟達していなかったが、その口から出づるところの言々句々、猛然として舌端火を吐き、聞く者を魅惑しなければ止まない」⁸³⁾講義をしたようである。この時の様子を妻の初子が、梅子に対して「そなたがそれほど熱心に耶蘇教を信心するようになった事がなによりもうれしい。近頃は父も母も、そなたと同様、喜んで耶蘇教の教えをきき、父がオーストリアから帰って以来、二人で毎日曜日、教会にお参りしている」⁸⁴⁾と書き送っているほどである。津田夫妻は娘の梅子と同様、キリスト教に接近し、1874(明治8)年1月にソーパーから洗礼を受けている。

津田はとくにプロテスタントの精神の重要性を説いている。たとえば、1880(明治13)年に北海道開拓使庁の依頼を受けて、『北海道開拓雑誌』を創刊している。この雑誌刊行の趣旨は、北海道開拓に従事することが「小にしては一家の福利を増し、これを大にしては子孫の永産を経営し、内はもって国力の富栄を助け、外はもって輸出入の権衡を均平すれば吾輩の本懐」であるとして、民富と国富のために北海道開拓を推進していくことであるとする(雑誌は隔週土曜日に発行された)。この雑誌の中で、津田は「開拓の四策」という論文を書いている。この四策とは、一に精神、二に圧制、三に屯田、四に保護、のそれぞれによる開拓の方法を説いているが、第一の精神、つまりプロテスタントの精神に基づくことが、開拓にとって最も重要であると説いている⁸⁵⁾。

津田はこの雑誌において1880(明治13)年4月に「赤心社員の奮発」(第6号と第7号)という論文を発表して、「赤心社」という組織と北海道開拓使との関係を紹介する。赤心社は、鈴木清(1848-1915、神戸のキリスト教徒で、牛肉の缶詰工場などを設立した実業家、以下は鈴木)という人物を中心に、1880(明治13)年に結成された、士族授産や北海道開拓を目的とする組織であった。津田は同年3月に、赤心社の発起人である加藤清徳(以下は加藤)と橋本一狼(『農業雑誌』の読者)からの手紙と、「赤心社設立の趣意」および「質問書」を受け取った。これに対して津田は、赤心社を「北海道開拓の良友」と表現して、「国家の衰運を挽回する大事業を興起せんと同盟の人々が申し合わせた」規則を紹介し、アメリカのプロテスタントの例を引き合いに出して激励している⁸⁶⁾。

1880(明治13)年8月に北海道開拓使長官から、赤心社に対して結社の許可が下りる。これを受けて赤心社は、北海道日高地方の西舎村(現・浦河町)への移住を開始する。しかし自然環境の苛酷さや、引率者の加藤には農業経験がなかったことなどから、開墾は容易に進まなかった。鈴木は神戸か

ら北海道へ出向き、北海道開拓使高官と会談を重ね、農業教師の派遣を要請している。さらに牛や農業機械などを購入し、開墾の促進を図っている。

津田は西舎村まで出向いて、視察を行なっている。もっともこの時の津田による視察は、西舎村の開墾というだけではなく、北海道調査の一環として、当地を訪れたのであった。津田による北海道調査は、1881（明治14）年にあらかじめ計画が立てられていたものであった。津田の調査には学農社が政府から北海道の土地払下げを受けて、開墾するという意図も含まれていた。この開墾には二つの目的があった。ひとつは旧幕臣の集まりである旧友会のための計画であり、土族授産を目的としていた。もうひとつは学農社のための計画であり、開拓の利益で学農社農学校の維持費をまかなおうということであった。この時の視察は、これらの下調べを兼ねたものであった。しかし前者の旧友会のほうは資金が集まらなかったため、実現しなかった。後者の学農社農学校のほうは土地が払い下げられたものの、開墾がうまく行かず、土地を返上したようである。結局、津田がもくろんだ北海道の開墾計画は失敗に終わる。

一方、赤心社のほうは1882（明治15）年に第2回の移住者が神戸を出発する。第2回目の引率者は、農業経験をもつ沢茂吉（1853-1909）であった。第2回目の移住先は西舎村ではなく荻伏（現・浦河町）であり、そこで、そば・小麦・麻などを栽培した。第1回目の西舎村とは異なり、開拓は順調に進み、開墾地を拡大して牧畜業や果樹、漆、桑などの栽培を進め、経営の多角化をしていった。現在もなお赤心社は、その経営内容は異なるものの、赤心株式会社として存続している。

農民の組織化という点で、北海道以外にも津田の啓蒙活動の影響がみられた。とくに津田は官の援助に依存しない農民の自主的な組織の形成を重視するが、その背景にあるのはキリスト教精神であった。津田は1880（明治13）年に「学農社に宛て、各地方の同学の士より頻々と農事の疑問が寄せられる」ことを受けて、各地に農事協会を開設して、毎月1回会合を開いて、「協議討論、その理を尋ね、たがいに知識を交換し」、自分たちで問題を解決していくことを勧めている⁸⁷⁾。官による農会に対抗して、官の援助に依存しない組織の形成を説いている。この津田の呼びかけに応えたのが、長野県の松本農事協会（松本農事会とも称せられる）であった。

松本では津田の学農社と連携して、1880（明治13）年5月に長野県の勸業世話係であった河野百寿（1822-1907）を会長にして、松本農事協会が結成される。そして松本城内に、学農社から取り寄せたリンゴと葡萄の苗木や野菜を栽培する第一試験場を設置している。さらに学農社の分社を名乗って、学農社から橘甚平を招請している。また『松本農事会月報』を創刊して、1881（明治14）年には修学場も設置している⁸⁸⁾。このような学農社とはほぼ同じ活動に対して、津田も積極的な働きかけを行ない、1888（明治21）年3月から4月にかけて、長野県内で巡回講演を行なっている。小諸、長野、松代、松本、飯田、上諏訪などを訪れ、勸業・宗教・徳育などについて講演をしている（『農業雑誌』、1888年5月15日、215ページ）。

民間の自主的な組織活動をふまえて、津田は1888（明治21）年に前述の「農会の自立を望む」を発表して、官製の組織を脱して「民間農事熱心家」の組織へと脱皮するように訴える⁸⁹⁾。翌1889（明治22）年には、各地に農業クラブを設立して、「知識を交換し、農事を研究するかたわら適宜の遊戯」も試みることを提唱する⁹⁰⁾。しかし津田は民間農事研究者だけに期待を寄せてはいない。民間農事研究者の多くは「老農」とよばれるが、津田によれば、老農は自分が体験した栽培技術がわかるだけで、その地域の勸業の計画や展望についてはほとんどわかっていないという。それにもかかわらず、政府が主導する農会や勸業諮問会などは、この老農だけを集めて行なっているという弊害がある。津田は『農業雑誌』上において政府の「保護政策の害悪」を訴え、農会の自立は不可能と考え、農民には独立不羈の気性を求め、農民団体には自主性を求めている（津田仙「保護政略の弊害」、1890年）。そして地域の大地主や有力者には、地元の勸業に関する計画性を持ち、将来展望を描くように求めている。このような津田の主張の背景にあるのは、キリスト教精神である。

津田は「我輩は我国農業を改進して富国の道を講ずると共に、人民の道德を天上界に高めんことを目的とするものなり」⁹¹⁾、さらに「農業の隆盛とキリスト教の真誠とを以て、宇内に有名なる北米合衆国は其富其道德天下に比なし」⁹²⁾と語る。津田はキリスト教信仰と農業発展は相乗的に高まっていくものであり、アメリカはその代表的な例であるとしている。つまり津田によれば、キリスト教精神と農業は表裏一体のものであり、相互に影響し合って普及ないし発展を遂げていくものである。

津田の啓蒙活動において、キリスト教精神と農業が相互に影響を及ぼすことは、日本国内だけでなく海外でも示された。1881（明治14）年に、韓国は「紳士遊覧団」（先進外国技術を受け入れるため外国文物を視察する目的で、朝鮮政府によって日本に派遣された使節団）を日本に派遣して、日本の文化諸施設や諸産業を視察する。使節団の視察部門は、施設部門、文物部門、制度部門の三つに分かれていた。使節団のなかの安宗洙（1859-1896、以下は安）は文物部門の新聞、博物館、福祉院、各種学校などを担当していたが、農業にも関心をもっていた⁹³⁾。

そこで安は来日した際に津田を訪ねる。津田はすでに前年の1890（高宗27）年に政府の招きで朝鮮を訪問しており、朝鮮農業論に通じている存在であったからである。安の著書『農政新編』には「日本農津田仙取用於稻花可謂補賛造化之良法也」と書かれ、津田の媒助法が紹介されており、農業に関して津田から影響を受けていたことがわかる⁹⁴⁾。津田は安に対して、「朝鮮人に向かい今日いささか農事を伝授したるは、すなわち貴国に報いたるゆえんなり。今を去る千有餘年前、貴国より論語を贈られ、その我国を益したること、実に大なり」と感謝の言葉を述べている。その上で「今や我国は、東天に旭日昇りたればすでに孔子の灯火を要せず」として、日本はキリスト教を知ったので、もはや儒教は必要ないと述べている。

安は津田の影響でキリスト教に関心をもったようであるが、当時の朝鮮ではキリスト教は禁制であった⁹⁵⁾。安は帰国後の1885（明治18）年に『農政新論』（全4巻）を刊行する。この著書の元に

なっているのは、佐藤信景『土性弁』、佐藤信淵『培養泌録』、津田仙『農業三事』などであった。安はこれらの著書に基づいて、土地の性質や肥料の製造法などについて解説し、西洋農法を撰取する必要性を訴える。安の著書の序文は、政府高官でもあり学者でもあった申箕善（1851-1909）が序文を書いている。その序文では、著書で説かれている農法は西洋人の方法であり、西洋人の方法はキリスト教の教えであるとしている⁹⁶⁾。

当時の朝鮮の開化運動は「自強」と「独立」を目標としていた。安の『農政新編』は自強のためには農業界においても、先進的な外国技術を取り入れるべきであると主張する。安は『農政新編』を朝鮮の同志に見せて、それが朝鮮各地の老農に伝えられ、その老農が地元の農民に教えるという展開をたどる。これは津田の啓蒙活動と、ほぼ同様の展開であったといえる。

安は津田の話を、当時、朝鮮宮廷の年歴記者であった李樹延（以下は李）に教える。李は日本に興味をもち、1882（明治15）年に第二次紳士遊覧団（朴泳孝使節団）の一行に加わって来日し、津田の元を訪れる⁹⁷⁾。李は津田の影響によって、キリスト教（とくにプロテスタント）への関心を深め、1883（明治16）年には東京露月町教会で安川亨（?-1908）牧師から洗礼を受ける⁹⁸⁾。その後、李は聖書を朝鮮語に翻訳出版し、さらに朝鮮でのアメリカの長老派教会やメソヂスト教会の橋渡し役として、朝鮮におけるキリスト教の先覚者となる⁹⁹⁾。

9 キリスト教精神と学校教育

当時のキリスト教徒、とくにプロテスタントは一般的に政治的ないし社会的な関心が強く、合理主義思想とも無縁ではなかった。明治初年から明治20年代にかけて、わが国のキリスト教は、日本社会の現状に対して様々な角度から強い関心を示し、プロテスタントの情熱に根ざす社会実践が、日本国内の新社会建設の原動力となっていた¹⁰⁰⁾。たとえば、プロテスタント系の学校が多く設立されるということも、その一例である。津田による学校設立などに対する支援活動も、キリスト教精神、とくにプロテスタンティズムがその原動力となった。

津田は学農社農学校と同様、キリスト教を創立の精神や指導方針に掲げる学校に関心を示し、その設立に協力している。津田はキリスト教を通して、農業教育にとどまることなく、特殊教育や女子教育などに関して理解と関心をもつ。この津田を評して、アメリカ・メソヂスト監督派教会の牧師であった本多庸一（1849-1912、後に青山学院院长）は「津田先生は、耶蘇教の心髄を握って居る人である。人生の苦界を退こうと思った人ではありません。現在は進歩の階梯と思って勇往邁進した人でキリストの心に適うた人と存じます」¹⁰¹⁾と語っている。津田のキリスト教精神は、机上で語られるものではない。その背景には社会実践、とくに農業実践があった。実践活動に基づくキリスト教精神が、学校教育に生かされるという展開をとる。以下では津田が主に関係した学校の事例を四つ上げる。

津田が協力した学校について、一つ目にあげられるのは「訓盲院楽善会」の創設である。これは

1874 (明治7) 年にスコットランド合同長老派教会の宣教師フォールズ (Henry Faulds, 1843-1930) が、東京築地の自宅に施療所を開設したことに端を発する。フォールズは宣教師であるとともに外科医でもあり、医師として治療にあたっていた。そして施療所を訪れる日本人患者に眼疾の患者が多いことを知り、その治療施設を建設することの急務を訴える。フォールズは「日本に盲人の多きこと、エジプトに二倍し、英国に三倍し、欧米諸国には未だかつて見ざる所なり、是は眼眵より伝染する一種の眼病に依れり、此の如き多数の盲人は之を教えるにバイブルをもってするより善きはなし、しかしてバイブルを授くるや、先づ之を日本語に翻訳するを以て急務とす。しかれば速かに之を日本の有志共謀協力して一の訓盲所を設立、日本語の聖書を凸字に製し、^{おおい}大に盲人の為に利益を起すべし。昔は英国の如きも、盲人の品位下劣にして常人に伍すること能わざりしも、凸字聖書の行わるるよりして、その品位ようやく上達し、盲人中より貴重なる紳士学者を出せる」¹⁰²⁾と訴える。

このフォールズの呼びかけに応じて集まったのが、アメリカ・ルーテル教会のボルシャルト (Burchardt) と、日本人では津田、古川、中村、そして岸田吟香 (1833-1905、以下は岸田) であった。このメンバーによって「楽善会」という会が発足し、会長には古川、書記には岸田が選ばれる。会の発足後、訓盲院の設立に動き始め、東京府に請願書を出すのが、許可されなかった。東京府は請願書に外国人宣教師の氏名があったため、これはキリスト教布教の一環であるとしてとらえたためであった¹⁰³⁾。楽善会はこれに対して、申請者のなかに政府関係者 (杉浦讓、前島密、小松彰、山尾庸三) を加えることで、東京府から認可を得ている。

しかし発起人となった官僚 (山尾庸三、1837-1917) からは「従前ノ事態タル概ネ外国人ニ依頼シ、且ツ彼ノ宗教ノカラ籍リテ以テ其志ヲ遂ゲント慾スルニ似タリ、是余ハ甚ダ喜バザル所ナリ、今後其弊ヲ矯正シテ而シテ宗教ノ如キハ内外共ニ之ヲ問フコトナク、専ラ本邦有志ノカラ協同シテ外国人ニ依頼スルコトナクンバ、余微力ナリト雖モ必將二本会ノタメニ竭ス所アラン」¹⁰⁴⁾ という忠告がある。訓盲院の設立に関して認可を得たものの、その設立の趣旨ともいべきキリスト教精神については、訓盲院の運営上、差し障りがあるとされる。そして設立の趣旨からキリスト教精神を外すように要請される。これによってフォールズが楽善会から脱会している。その後、訓盲院楽善会は1887 (明治20) 年に「東京盲啞学院」(現・筑波大学付属盲学校) と改称して、文部省の所管となる。津田は文部省囑託となって、フォールズが去った後の学院を支援し続けている¹⁰⁵⁾。

津田が関わった二つ目の学校に、築地の「海岸女学校」がある。海岸女学校 (当初は女子小学校) は1874 (明治7) 年にソーパーと同じアメリカ・メソジスト監督派教会の婦人宣教師スクーンメーカー (Dora E. Schoonmaker, 1851-1934) によって設立される。宣教師スクーンメーカーは布教活動とともに、女子教育に着手する。津田はソーパーからの依頼によって、スクーンメーカーに協力する。しかしその生徒募集について、「さて、生徒を募らんとして、彼方此方と勸諭したれど、女子に教育とは、と笑いおりて、応ずる者なければ、余、妻、妻の友、わが娘など駆り集め、僅か五人の生徒にて開校

しぬ。されど、それにしては余り少しとて、女の学校へ、わが子の太郎、次郎などを入れて学ばしき」という状態であった¹⁰⁶⁾。生徒はまったく集まらなかったようである。

そこでとりあえず津田の家族を生徒にして、1874（明治7）年11月に「女子小学校」として発足する。そして1875（明治8）年6月に校名を「救世学校」と改称する。津田の妻の初子はこの学校で英語を学んでいるが、スクーンメーカー校長は、英語教育のみに固執するのではなく、日本語教育の必要性も訴えて、慶應義塾から高津柏樹（1836-1925）を招いて、習字と漢書の講義も実施している。女子生徒は徐々に増え始め、その生徒にキリスト教が浸透していく。1876（明治9）年には女子生徒のなかから4名の受洗者が出る。この学校は移転にともない、1878（明治11）年に「海岸女学校」と校名を改める。その後、スクーンメーカーの帰国や、校舎が火災に見舞われるなど、数々の問題に直面するが、明治期におけるキリスト教精神に立脚する女子教育の先駆となった。1882（明治15）年11月にアメリカから帰国した梅子は、海岸女学校において英語教師として約2ヶ月勤めている。

三つ目にあげる津田が支援した学校も、女子学校である。アメリカ・フィラデルフィアのフレンド派の婦人伝道会が、当時、現地に滞在していた新渡戸と内村の二人の意見を参考にして、日本で教育施設を開設するために、ジョセフ・コサンド（Joseph Cosand, 1852-1932）夫妻を派遣する。コサンド夫妻は1885（明治18）年に横浜に到着するが、当時、外国人は居留地以外に居住することが認められていなかった。そこで津田はジョセフ・コサンドを学農社農学校の農学教師として雇用するという方法をとって、居留地外の居住願いを外務大臣（井上馨）に提出する。さらに津田は自宅の一部を提供して、コサンド夫妻の住居や教室としている。

コサンド夫妻による学校は「普連土女学校」（現・普連土学園）という名称で、1887（明治20）年9月に政府の認可を受け、正式に開校する¹⁰⁷⁾。この学校の初代校長は、学農社農学校で英語教師をしていた海部であった。海部はキリスト教徒ではなかったが、津田が「海部君、君はこれ迄、永い間、無信仰の生活を続けて来られたようだが、此処で見切りを付け、何か国家の為に確実な仕事をなすよう決心してはどうですか、これには君の心の底に確固たる信念が無ければ駄目ですから、幸い、僕の貸家にコサンドと言う米国の宣教師が住居して、日曜日毎に聖書の講義をしていますから、僕が案内しますから、これから一緒に行こうではありませんか」¹⁰⁸⁾と声をかけたことがきっかけとなる。海部はコサンド夫妻の学校の教師として勤めるようになり、校長となっている。

四つ目の津田が関係した学校は、1878（明治11）年5月に設立された「耕教学舎」（現・青山学院）である。当時、生徒であった山鹿旗之進（1860-1954）によれば「東京築地一丁目にあった耕教学舎と称する農校は、明治十年にソーパー博士の創立したものであった」¹⁰⁹⁾とされる。しかし耕教学舎は紆余曲折を経た後に、同志社出身の杉田と和田正幾（1859-1933、以下は和田）とが教育と運営との両方を担い、この二人に一切の学校運営が委ねられている。杉田と和田が運営に加わったのは、津田と新島との親交に関係している。津田と新島とは前述のように幕末期から親交があったが、1873（明治6）

年以降にキリスト教の禁教令が解かれた後に、外国人の日本への帰化や寄留の周旋に協力し合って奔走していた¹¹⁰⁾。耕教学舎の設立の際にも、津田によって同志社出身の杉田と和田が抜擢される。

耕教学舎は1881(明治14)年に京橋区銀座に移転し、「東京英学校」と改称される。当時の新聞は外国人宣教師をかかえた特色のある学校と報じている。キリスト教が学校運営の障害になっていなかったようであり、当時のわが国の教育における極端な欧化政策の影響である。耕教学舎の入学希望者は100名を超え、学生のなかには農芸化学の古在由直(1864-1934)や幸田露伴(1867-1947)らがい¹¹¹⁾。東京英学校は文字通り英語を中心とする教育機関であったが、プロテスタント的教育方針に基づき、校規に違反したものは退学させるという厳格な精神教育が実施された。

1882(明治15)年に東京英学校は、横浜にあった「美会神学校」と合併する。美会神学校はアメリカ・メソジスト監督派教会の宣教師マクレイ(1824-1907、Robert Samuel Maclay)によって、1879(明治12)年に横浜に設立され、当時、学生数26名(そのうち9名は神学生)を抱えていた。この合併の後、赤坂区青山に土地を取得して校舎を建設し、1883(明治16)年に校名を「東京英和学校」(Tokyo Anglo Japanese College)と改称する。東京英和学校はマクレイが総理となり、校長には板垣帰一が選出される。そして学校の監理機関として「委託人会」(後の商議会)を設置する。委託人会は在日アメリカ・メソジスト監督派教会宣教師、在カナダ・メソジスト教会宣教師、アメリカ公使などによって構成された。最初の会合は1885(明治18)年6月に開催され、マクレイが議長に、カナダ・メソジスト教会の宣教師カクランが第一副議長に、津田が第二副議長に選ばれている(「私立青山学院一覧1916-17年」)。こうして東京英和学校は青山学院として発足する。

10 結びにかえて

津田は1890年代の足尾銅山鋳毒事件では田中正造(1841-1913)を助け、農民救済運動に奔走している¹¹²⁾。しかし1897(明治30)年には事業を次男に譲り、引退して鎌倉で過ごすようになる。そして1908(明治41)年に津田は東海道本線の車内で、脳出血のために71歳で逝去する。葬儀は青山学院の講堂で行なわれた。津田の死後、内村や新渡戸らは追悼文を発表し、津田の業績を讃え、津田のことを「大平民」¹¹³⁾と呼んでいる。津田は民間にあって多方面で大きな足跡を残した。

内村は津田の功績を讃えて、以下のように述べている¹¹⁴⁾。同じキリスト教徒からみた津田の農業に関する業績について語っているので、やや長いが引用する。

先進津田仙君、農に従事すること茲に三十余年、我が国に於ける君の新式農業は其の齢を明治政府と同じうし、而も其の功^{はるか}廻に閥族輩の上に出づ。彼等が自己のために名利を計りつゝ、僅に国家を其の外面に於て飾らんとしつゝ、ありし間に、君は^{ひとり}単独国家を其の^{どだい}基本より改造せんとし給ふた。君は西洋文明を直に我が国の土壤に移植せんとし、克己勉励今日に至り給ふた。若し国家に功臣がありとすれば、君は確に其の一人である。而も君は今日尚ほ無位の一平民であつて、心

に天の神を信ずる外に普通の日本農民と何の異なる所はない。

茲に於て君の農業の普通の農業でないことが判る。津田式の農業は第一に文明流の農業である、則ち古説旧習に依る農業でなくして、学説進歩の農業である。第二に平民的農業であつて、資を官に仰ぎ、位階勲章を以て誇るが如き役人的農業ではない。第三に信神的農業である、則ち単に産を獲て満足する農業ではなくして、体を養ふと同時に天に徳を積まんとする農業である。君の農業が其の長命なるに干らず、政府の深く之を賞することなく、公衆の広く之を迎ふることなきは其の全く脱俗的農業であるからである。而も天は君の業を恵んで、君の晩年をして感謝と満足との生涯たらしめ給ふた¹¹⁵⁾。

と記している。

内村は津田の農業を評して、三つの特徴があると指摘する。すなわち一つは科学に基づく農業である。二つは国家の支援のない民間の農業である。三つは単に生産物を得るのではなく、キリスト教の信仰に適った農業である。内村が語るように、津田の農業は宗教に則った「天に徳を積まんとする農業」であった。内村は農業発展のためには科学性や自立性（国家の支援に頼らない）はもとより、宗教性も必要であると考えた。内村はさらに続けて、

真正の宗教は真正の農業の眞の兄弟である。宗教は心を耕すもので、農業は地を耕すものである。実物を貴び、空想を排する点に於ては二者全く同一である。故に津田先生が農に従事して深く宗教を信ぜらるゝやうに、余は宗教の伝道に従事して、深き興味を農業に於て有つ者である。先生が政府に頼らずして独り其の業に励まるゝやうに、余は政府は勿論、教会又は外国宣教師は一切頼ることなく独り余の業に勉むる者である¹¹⁶⁾。

と記している。内村は宗教と農業とは密接な関係があるという。津田が農業に従事してキリスト教を信仰しているのと同じように、内村はキリスト教の伝道に従事して、農業に関心をもっている。そしてお互いに実物を貴んでいる点と、政府や教会組織に頼っていない点が共通している。内村によれば、津田は信仰と合理主義を両立している。むしろ信仰を生かすことによって、実社会での合理主義が育まれていると語る。

津田はキリスト教（プロテスタント）の精神を生かして、資本主義的な農業経営の展開を考えた。津田がキリスト教に関心をもったのは、社会の進歩と文明化に貢献している宗教であるという理由からであった。しかしながら晩年に「当時キリスト教に対する思想と信念とは甚だ浅薄なものであった故、之を奉じて国家の為に尽さんとの単純なる志望に過ぎなかつた」¹¹⁷⁾と述懐している。津田にとって、この国家とはもちろん封建制の国家ではなく、絶対主義的な国家でもない。「農業の隆盛とキリスト教の眞誠とを以て宇内に有名なる北米合衆国は其富其道徳天下に比なし」と語っているように、キリスト教国アメリカであり、近代国家としての日本であった。

一般的にキリスト教精神を生かすことによって、「国富」と「民富」の増大が考えられる。しかし津

田の場合は、学農社による啓蒙活動や農業の普及活動を通して、国富と民富の間ともいべき「地方富」の増大を考えている。すなわち、地方における自立した農業技術の改良、地域特産品の形成による地方経済の振興、開拓に従事する農民組織をはじめとして農民の自主的な組織化などを通して、各地域での富の増大を考えている。

しかしながら津田は基督教の教理に関して、深い内容を展開しているわけではない。知育と徳育の両方を兼ね備えた「全き人間」となることの重要性和、宗教による徳育の必要性を述べるにとどまっている（津田仙「徳育の必要を論じ青年諸君に告ぐ」）。しかし津田をはじめ、明治初期のキリスト教徒には興味深い点がある。それは多くが佐幕派の士族であったという点である¹¹⁸⁾。この点に注目した隅谷三喜男（1916-2003）によれば、当時のキリスト教徒の特質は「人格の発見による新しい倫理主義であり、ピューリタニズムである。（中略）この倫理主義は封建的＝日本的な倫理に対する批判反撃の叫びであり、近代日本の倫理的基盤確立の声であった。市民社会においては市民一人一人が人格として尊重されねばならず、権利と義務の主体として確立されなければならない。（中略）キリスト教徒となった人々はそれを、神の前に四民の平等を教えるキリスト教の中に発見したのである」¹¹⁹⁾としている。なるほど津田は封建社会において、さらに近代社会においてさえも、周縁に追いやられ、蔑ろにされた人々と関わり続けた。つまり農業、障害者、女子などであり、それぞれに対する教育であった。津田は基督教を通じて、日本的な倫理に対する批判、農民を含めた市民の人格の尊重、権利と義務の主体としての確立をめざしたといえる。

しかし基督教精神の発揮は、津田が思い描いた通りにはならなかった。基督教は明治20年代の欧化政策のなかで、急速な普及を遂げたものの、それによって信教の自由が保障されたというわけではなかったからである。なるほど1889（明治22）年に発布された憲法では、第二十八条に「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨グズ及臣民タルノ義務ニ背カザル限りニ於テ信教ノ自由ヲ有ス」とされて、信教の自由がうたわれた。しかしこれは秩序の維持や臣民としての義務を履行するという前提条件が付けられたものであった。つまり、当時の日本では信教の自由の上位に置かれた規律があった。このような状況の下で、津田が基督教に啓蒙活動の精神を求めようとすれば、徐々にこの規律に抵触することになってしまう。津田は学農社農学校をはじめ、いくつかの学校の設立に関わった。そのたびに直面した問題は、基督教精神に基づくという点であった¹²⁰⁾。

この問題は津田ばかりでなく、娘の梅子も関わる。梅子は1882（明治15）年に帰国したが、1889（明治22）年に再び渡米して、プリンマー・カレッジに入学して生物学のコースを履修する。生物学の研究は、梅子の予てからの希望であった¹²¹⁾。しかしアメリカ滞在中に、友人のアリス・ベーコン（Alice Mabel Bacon, 1858-1918）の「日本の女性」に関する研究の取りまとめを手伝う中で、日本の女子教育の必要性を痛感する。そして1892（明治25）年8月に帰国して、華族女学校（後に学習院と併合して学習院女子部）の教壇に立ったものの、基督教に対する反発は強かった。たとえば当時、

井上哲次郎（1856-1944）の『教育と宗教の衝突』（敬業社、1893年）などが発表され、キリスト教は日本の教育原理にそぐわないといわれていた。しかし梅子は真の教育はキリスト教によって達成されるという信念をもっていた。

キリスト教との関係という根本的な問題を抱えていたとはいえ、女子の高等教育に関しては、ある程度の進展がみられた。1899（明治32）年2月には高等女子学校令が公布され、同年8月には私立学校令も公布されて、女子教育に対する関心が高まる。このような状況のなかで梅子は1900（明治33）年7月に華族女学校を辞め、キリスト教に基づく女子高等教育を行なう私塾の設立を計画する。この計画に対して津田は、キリスト教に基づいていたこと、さらに英語を主とする私塾であるという二つの点で、設立構想に賛同した。こうして「女子英語塾」は1900（明治33）年9月に開校式をむかえ、現在（津田塾）に至っている。

注

- 1) 以下の梅子に関する記述は、山崎孝子『津田梅子』、吉川弘文館、1962年；吉川利一『津田梅子』、中公文庫、1990年；津田塾大学創立90周年記念事業出版委員会編『津田塾大学 津田梅子と塾の90年』、津田塾大学、1990年；Furuki, Yoshiko, *The White Plum A Biography of Ume Tsuda—Pioneer in the Higher Education of Japanese Women*, Weatherhill, 1991. に負っている。
- 2) 当時の新渡戸は、旧制第一高等学校の校長に就任し、さらに地方学を唱え始めた時期であった。つまり教育に本格的に取り組んだ時期であり、一方で地域振興の研究を説いた時期であり、津田と問題意識が重なっていたといえる。拙稿『近代日本の農業政策論—地域の自立を唱えた先人たち』、昭和堂、2012年、25～9ページ。
- 3) 中西進「日本人意志の力 20 津田仙」（『ウエッジ』、第20巻8号、2008年、132～4ページ）。
- 4) 伊東俊太郎・広重徹・村上陽一郎『改訂新版 思想史のなかの科学』、平凡社ライブラリー、2002年；村上陽一郎『人間にとって科学とは何か』、新潮選書、2010年。
- 5) 拙稿「明治初期の高等農業教育とその定着要因—京都農牧学校の設立と展開を通して」（『京都産業大学論集人文科学系』、第29号、2002年、72～102ページ）。
- 6) 木村直樹『<通訳>たちの幕末維新』、吉川弘文館、2012年、80～149ページ。
- 7) 篠丸頼彦『佐倉城の歴史』、佐倉市、1966年、31ページ。
- 8) 大久保利謙『明六社』、講談社学術文庫、2007年、227～71ページ。
- 9) 福沢諭吉『福翁自伝』、岩波文庫、1954年、99ページ。
- 10) 森山はアメリカ人マクドナルド (Ranald MacDonald, 1824-1894) から直接、英語を学び、ペリー (Matthew Calbraith Perry, 1794-1858) の1854 (嘉永7) 年の来航時に通訳をつとめている。
- 11) 青山なを「明治女学校の研究」（『青山なを著作集』第2巻、慶応通信、1970年、443ページ）。
- 12) 井上勝也「教育者 新島襄」（『文化学年報』、第37号、1988年、54～80ページ）。
- 13) 山鹿旗之進「亡き人の面影 (2)」（『護教』、第877号、1907年5月16日、6ページ）；都田豊三郎『津田仙—明治の基督者』、三五堂、1972年、71～2ページ。

- 14) 古木宜志子『津田梅子』、清水書院、1992年、79ページ。
- 15) 本井康博「新島襄と津田仙」(『キリスト教社会問題研究』、第50号、2001年、101～3ページ)。
- 16) 津田と新島の関係については、高道基「津田仙と新島襄」(『同志社時報』、第91号、1991年、55～60ページ)。
- 17) 藤井哲博『咸臨丸航海長小野友五郎の生涯—幕末明治のテクノクラート』、中公新書、1985年、117～8ページ；礪川全次『知られざる福沢諭吉—下級武士から成り上がった男』、平凡社新書、2006年、75～107ページ。
- 18) 維新史学会編『幕末維新外交史料集成』第6巻、財政経済学会、1944年、307ページ。
- 19) 農商務省農務局編『大日本農史』、博文館、1891年、83ページ。
- 20) 津田は1870(明治3)年に明治新政府に対して「士民集会所取り建て候儀願ひ奉り候書付」を提出する。「西洋の例にならぬ」、築地ホテルの半分を政府が借り上げ、「内外の書籍、新聞紙を備え(中略)学科芸術の発明、物産・商法・開墾などに至るまで」議論できる「學術の文社」を設置するように提案している。この構想は明六社の設置の約3年前のことであり、明六社の先駆けとなるようなものであったといえる。
- 21) 國雄行「明治初期民部省の勸農政策—開墾政策を中心に」(『人文学報(首都大学東京都市教養学部人文・社会系)』、第385号、2007年、1～25ページ)。
- 22) 津田は1870(明治3)年に太政官から、東伏見宮嘉彰親王の通訳として、イギリスへの随従を命じられる。翌1871(明治4)年に帰国している。
- 23) 鈴木博之『日本の近代10都市へ』、中央公論新社、1999年、111～3ページ。
- 24) 北海道開拓使の事業展開については、富士田金輔『ケプロンの教えと現術生徒—北海道農業の近代化をめざして』、北海道出版企画センター、2006年。
- 25) ブラントは1859(安政6)年に、プロイセン使節のオイレンブルク(Friedrich Albert Eulenburg, 1815-1881)の随員として来日する。1862(文久2)年にプロイセンの初代駐日領事として横浜に着任し、1867(慶応3)年にプロイセン代理公使に昇任する。1868(明治元)年に北ドイツ連邦総領事に就任し、1872(明治5)年に駐日ドイツ全権公使となっている。1875(明治8)年に離日するまで、対日外交および日独文化交流に尽力した。1873(明治6)年に、在日ドイツ人を対象にしたドイツ東亜細亜協会を設立し、初代会長となる。
- 26) 津田仙「農業実歴譚」(『農業雑誌』、第1020号、1908年5月、212～3ページ)。ただし、農林省蚕糸園芸局編『果樹農業発達史』(農林省蚕糸園芸局、134ページ)では、「黄檗山」と記されている。
- 27) 逢坂信吾『黒田清隆とホーレス・ケプロン：北海道開拓の二人—その生涯とその事績』、北海タイムス社、1962年；メリット・スター著/西島照男訳『ホーレス・ケプロン将軍—北海道開拓の父の人間像』、北海道出版企画センター、1986年；ホーレス・ケプロン著/西島照男訳『ホーレス・ケプロン自伝』、北海道出版企画センター、1989年。
- 28) 谷邨一佐『奎普龍将軍』、山口惣吉、1937年、36～8ページ。
- 29) ランメンについては、都田豊三郎、前掲書、1972年、33～8ページ。
- 30) 津田仙「果物種類の改良、柿の種類」(『農業雑誌』、第283号、1887年、500ページ)。
- 31) 大蔵省勸農寮の勸農政策については、國雄行「明治初期大蔵省の勸農政策」(『人文学報(首都大学東京都市教養学部人文・社会系)』、第430号、2010年、1～31ページ)。大蔵省勸農寮はアメリカ農業の導入

- に熱心に取り組むが、財政状態の悪化とともに、1873（明治6）年に廃止される。その後、勸農政策は同年に設置される内務省勸業寮に引き継がれる。
- 32) 平山成信『昨夢録』、平山成信、1924年、99ページ；吉田光邦編『図説万国博覧会史 1851-1942』、思文閣出版、1985年；吉田光邦『改訂版万国博覧会—技術文明史的に』、NHKブックス、1985年。
 - 33) 当時の先進諸国の農業は、化学などの発達で科学の有用性が認められつつあった。Busch, Lawrence and Sachs, Carolyn, *The Agricultural Sciences and the Modern World System* (Busch, Lawrence, *Science and Agricultural Development*, Allanheld, Osmun, 1981, pp.131-56)；拙稿「農業試験場」(加藤友康編『歴史学事典 第14巻 ものとわざ』、弘文堂、2007年、481～2ページ)。
 - 34) 津田仙『荷衣伯連氏法農業三事（上）（下）』、前川善兵衛・青山清吉、1874年。
 - 35) 麻井宇介『日本のワイン・誕生と揺籃時代』、日本経済評論社、1992年、76ページ。
 - 36) 斎藤之男『日本農学史 第二巻』、農業総合研究所、1970年、12ページ。
 - 37) 明治文化研究会編『明治文化全集 第5巻 雑誌篇』、日本評論社、1928年、252～4ページ。
 - 38) 「初子から梅子に送った手紙 1876年3月24日付」(都田豊三郎、前掲書、1972年、53～4ページ)。
 - 39) 農林省農務局編『明治前期勸農事蹟輯録 下』、大日本農会、1939年、1178～80ページ。
 - 40) 同上書、1167～9ページ。
 - 41) 同上書、1165ページ。
 - 42) 斎藤之男、前掲書、1970年、13～4ページ。
 - 43) 農林省農務局編、前掲書、1939年、1194～5ページ。
 - 44) 石山洋「津田仙の業績」(『国立国会図書館月報』、1966年7月、32ページ)。
 - 45) 関根要八『恩師ソーバル博士』、関根要八、1938年、19ページ。
 - 46) 学農社の教員は同志社と関係をもっていた人が多い。本井康博「同志社と学農社」(『キリスト教社会問題研究』、第49号、2000年、100～21ページ)。
 - 47) 福羽逸人著・村岡輝三ほか編『福羽逸人回顧録』、国民公園協会、2006年、12ページ；玉利喜造先生伝記編纂事業会編『玉利喜造先生伝』、玉利喜造先生伝記編纂事業会、1974年、431ページ；麻生幸二郎編『産業界の先駆 宇喜多翁』、麻生幸二郎、1931年、14ページ。
 - 48) 内山一幸「明治前期における大名華族の意識と行動—立花寛治の農事試験場建設を事例に」(『日本史研究』、第576号、2010年、1～22ページ)。
 - 49) 文部省実業学務局編『実業教育五十年史』、実業教育五十周年記念会、1936年、23ページ。
 - 50) 飯塚銀次「津田仙の学農社の経営とその教育史的意義—私学における明治初期産業教育の発達」(『私学研修』、第17号、1962年、75ページ)。
 - 51) イギリスから教師を招聘した経緯については、拙稿「19世紀後半のイギリス高等農業教育の展開—王立農業カレッジの模索」(『京都産業大学国土利用開発研究所紀要』、第22号、2001年、1～33ページ)。
 - 52) 飯塚銀次、前掲論文、1962年。
 - 53) 麻生幸二郎編、前掲書、1931年、19ページ。
 - 54) 同志社社史資料室編『創設期の同志社—卒業生たちの回想録』、同志社社史資料室、1986年、70ページ。
 - 55) 伝田功『近代日本経済思想の研究—日本の近代化と地方経済』、未来社、1962年、173ページ。
 - 56) 小倉倉一「明治の自由主義農学者 津田仙—産米検査成立とその時代」(『農林春秋』、第1巻5号、1951年、37～41ページ、50ページ)。

- 57) 津田仙「農会の自立を望む」(『農業雑誌』、第322号、1888年12月15日、545ページ)。
- 58) 黒木彬文「興亜会のアジア主義」(『法政研究』、第71巻4号、2005年、628ページ);文殊谷康之『渡邊洪基伝—明治国家のプランナー』、幻冬舎ルネッサンス、2006年、108～10ページ。
- 59) 黒木彬文「自由民権運動と万年会の成立—非藩閥政府高官・渡辺洪基の殖産興業活動」(『政治研究』、1987年、58～66ページ)。
- 60) 当時の農業雑誌の動向については、福澤徹三「農業雑誌の受容と実践—南多摩郡平尾村鈴木静蔵の事例を中心に」(『一橋論叢』、第134巻4号、2005年、227～51ページ)。
- 61) 小木新造『ある明治人の生活史—相沢菊太郎の七十八年間の記録』、中公新書、1983年。
- 62) 色川大吉『日本の歴史 第21巻 近代国家の出発』、中央公論社、1968年、332ページ。
- 63) 徳富健次郎『みみずのたはこと (上)』、岩波文庫、1938年、29ページ。
- 64) 黒住武市『日本通信販売発達史—明治・大正期の英知に学ぶ』、同友館、1993年、25ページ;斎藤駿『なぜ通販で買うのですか』、集英社新書、2004年、18～24ページ。
- 65) 拙稿「19世紀中期におけるイギリス農学の展開」(『京都産業大学国土利用開発研究所紀要』、第15号、1994年、24～41ページ);拙稿「19世紀後半イギリスにおける農業研究体制の特徴」(『京都産業大学国土利用開発研究所紀要』、第20号、1999年、31～52ページ)。
- 66) 拙稿「明治・大正期における百貨店の形成—高島屋と三越の展開を中心に」(『京都産業大学日本文化研究所紀要』、第16号、2011年、427～9ページ)。
- 67) 日本の通販は、大正期に入ると「安かろう悪かろう」の商品が多くなり、著しいイメージダウンを起こす。この結果、百貨店などによる通販を除き、通販は衰退していく。それに追い打ちをかけたのが、第一次世界大戦後の不況であり、農村部での需要が減退し、農民が通販から離脱していった。石光勝・柿尾正之『通販—「不況知らず」の業界研究』、新潮新書、2010年、32～5ページ。
- 68) 満園勇「戦前期宇治茶産地における国内市場への展開—通信販売を中心に」(『社会経済史学』、第74巻1号、2008年、41～62ページ)。
- 69) 学農社では『農業雑誌』のほかに、1902(明治35)年に新たに月刊で『園芸世界』誌を創刊している。この雑誌は1906(明治39)年6月(48号)まで続いた。
- 70) 富山時子編『普連土女学校五十年史』、普連土女学校、1937年、119ページ。
- 71) 伝田功、前掲書、1962年、173ページ;上山和雄「農商務省の設立とその政策展開」(『社会経済史学』、第41巻3号、1975年、47～68ページ;荒幡克己『明治農政と経営方式の形成過程』、農林統計協会、1996年、108～268ページ;勝部真人『明治農政と技術革新』、吉川弘文館、2002年、24～57ページ)。
- 72) 朝比奈貞良編『大日本洋酒缶詰沿革史』、朝比奈貞良、1915年、215ページ。
- 73) 栗原は1878(明治11)年に牧畜や紡績業を起こすために「農産社」という会社を設立している。このことは『農業雑誌』(1878年4月25日号、158ページ)で紹介されている。その後、栗原は『桑葉萎縮病論』などの小冊子を著わし、孔丘報徳社社長、山梨農会幹事長、甲州葡萄栽培同業組合長などをつとめた。『栗原信近の生涯』(樽林精尊、1970年)を著わした佐藤森三は、栗原を「明治の二宮尊徳」と評している。
- 74) 高崎宗司『津田仙評伝—もう一つの近代化をめざした人』、草風館、2008年、83～5ページ。
- 75) 福羽逸人著・村岡輝三ほか編、前掲書、2006年、13ページ。
- 76) 津下剛『近代日本農史研究』、光書房、1943年、321～43ページ。

- 77) 津田仙「葡萄栽培の利益」(『北海道開拓雑誌』、1880年3月27日号、98ページ)。
- 78) 南野純子『泉州玉葱と坂口平三郎』、南野純子、1987年。玉葱作の展開については、拙稿「野菜作の展開と産地形成」(坂本慶一・高山敏弘編『地域農業の革新』、明文書房、1983年、102～24ページ)。
- 79) 伝田功、前掲書、1962年、197～8ページ。
- 80) 同上書、64～5ページ。
- 81) 大久保利兼、前掲書、2007年、47～8ページ。
- 82) 遠山茂樹「明六雑誌」(『思想』、第447号、1961年、117～28ページ)。
- 83) 山鹿旗之進「日本メソヂストの父スーパー博士を想う」(『日本メソヂスト新聞』、第2161号、1933年6月11日付)。
- 84) 関根要八編、前掲書、1938年、19ページ。
- 85) 津田仙「開拓の四策」(『北海道開拓雑誌』、第2号、1880年2月、7ページ)；友田清彦「伊地知正治の勸業構想と内務省勸業寮」(『日本歴史』、第650号、2002年、70ページ)。
- 86) 津田仙「赤心社員の奮発」(『北海道開拓雑誌』、第7号、1880年4月24日、147～51ページ)。
- 87) 津田仙「農事協会開設の大意」(『農業雑誌』、第97号、1880年1月10日、16ページ)。
- 88) 有賀義人『信州の啓蒙家 市川量造とその周辺』、凌雲堂書店、1976年、392～5ページ。
- 89) 津田仙「農会の自立を望む」(『農業雑誌』、第322号、1888年12月15日、545ページ)。それまでの農業の組織化の動向については、國雄行「内務省の勸農政策(1873～1881年)―勸業諸会の分析を中心に」(『社会経済史学』、第67巻6号、2002年、27～49ページ)。
- 90) 津田仙「農業俱樂部と禁酒主義」(『農業雑誌』、第331号、1889年3月15日、113ページ)。
- 91) 生江孝之『日本基督教社会事業史』、日本図書センター、1996年、214ページ。
- 92) 津田仙「農業俱樂部と禁酒主義」(『農業雑誌』、第331号、1889年3月15日、114ページ)。
- 93) 金文吉『津田仙と朝鮮―朝鮮キリスト教受容と新農業政策』、世界思想社、2003年、85～7ページ。
- 94) 同上書、18～9ページ。
- 95) 朝鮮のキリスト教、とくにプロテスタントの受容については、浅見雅一・安延苑『韓国とキリスト教―いかにして“国家的宗教”になりえたか』、中公新書、2012年、83～127ページ。
- 96) 安宇植「津田仙と二人の朝鮮人」(『青丘』、第9号、1991年、216ページ)。
- 97) 開化党の一員であった朴泳孝は、後に甲申政變の主役となった。
- 98) 1883(明治16)年6月に津田は朝鮮を訪れているが、この時はキリスト教関係ではなく、もっぱら農業に関することであった。
- 99) 金文吉、前掲書、2003年、109～38ページ。その後の朝鮮における米を中心とした農学の展開については、藤原辰史『稲の大東亜共栄圏―帝国日本の<緑の革命>』、吉川弘文館、2012年、73～110ページ。
- 100) 加藤正夫『明治期基督者の精神と現代』、近代文芸社、1996年。
- 101) 高木壬太郎『本多庸一先生遺稿』、日本基督教興文協會、1918年、342ページ。
- 102) 東京盲学校編『東京盲学校六十年史』、東京盲学校、1935年、17ページ。
- 103) 都田豊三郎、前掲書、1972年、83～4ページ。
- 104) 同上書、84～5ページ。
- 105) 同上書、86～8ページ。
- 106) 同上書、99ページ。

- 107) 普連土女学校編『普連土女学校五十年史』、普連土女学校、1937年。
- 108) 同上書、117ページ。
- 109) 山鹿旗之進「日本メソジストの父スーパー博士を憶う」(『日本メソジスト新聞』、1933年6月2日付、216ページ)。
- 110) 磯辺弥一郎「津田女史の厳父津田仙氏」(『英語青年』、第62巻3号、1927年、104ページ)。
- 111) 古在については、拙稿「農科大学の課題と教授職の役割—古在由直の再評価を通して」(『京都産業大学論集社会科学系列』、第29号、2012年、69～118ページ)。
- 112) 津田仙「足尾銅山の鉍毒は試験上果たして作物に大害あり」(『農業雑誌』、第447号、1892年6月5日)；津田仙「農務局試験場に於ける銅害の実験」(『農業雑誌』、第448号、1892年6月15日)。
- 113) 嶋田順好「津田仙—基督にある大平民」(『キリスト教と文化』、第26号、2010年、91～116ページ)。
- 114) 内村の宗教観および農業観については、拙稿「内村鑑三における二宮尊徳像の形成」(『報徳学』、第8号、2011年、85～104ページ)。
- 115) 内村鑑三「農業と宗教」『農業雑誌』第百拾号を祝するの辞」(『農業雑誌』、第810号、1902年、290ページ)。
- 116) 同上書、290ページ。
- 117) 宍峯生「津田仙氏と語る」(『護教』、第697号、1904年12月)。
- 118) 太田愛人『明治キリスト教の流域—静岡バンドと幕臣たち』、中公文庫、1992年。
- 119) 隅谷三喜男『近代日本の形成とキリスト教』、新教新書、1961年、17～8ページ。
- 120) キリスト教排斥の動きについては、麻生将「近代日本のキリスト教をめぐる言説空間の形成と展開に関する試論—昭和戦前期の新聞記事をテキストとして」(『歴史地理学』、第54巻3号、2012年、20～35ページ)。
- 121) 梅子は後にノーベル医学生理学賞を授与されたモーガン (Thomas Hunt Morgan, 1866- 1945) と共著論文を発表している。Morgan, T. M. and Tsuda, Ume, The Orientation of the Frog's Egg, *Quarterly Journal of Microscopical Science*, vol.35 (1894), pp.373-405.

Enlightening Activity of Sen Tsuda in the Meiji Period — Agriculture and Christianity —

Nobuhisa NAMIMATSU

Abstract

Sen Tsuda (1837-1908) was the Christian agriculturist who played an active part for the Meiji period. He played an active part in many aspects. For example, he performed cultivation, sale, and import of farm products. Furthermore, he organized an agriculture group (“Gakunousya”) and published agriculture books and “Agriculture Magazine”. On the other hand, he cooperated with the establishment of some schools based on the Christianity mind.

The past results of research did not connect the side of the Christian with the side of the agriculturist. This report analyzed activity of Tsuda and clarified an association between agriculture and Christianity. Various activities that he performed was enlightenment movements. His enlightening activity broke a tradition and prejudice. Besides, his activity was private without the support of the government. His activity resisted bureaucratization rather than he received support of the government. He did not depend on government support and acted in conformity with Protestantism.

Tsuda did not know the scientific agriculture and the Christian creed well. His purpose was to tell a principle and knowledge to a farmer clearly, not to study agriculture and Christianity. He hoped that a farmer ran rational economic life. It is necessary for a farmer to be aware of profit characteristics to achieve his aim. The awareness is led by Christianity mind.

By his enlightenment movement, the local special products were created. For example, it was viticulture and wine production of Yamanashi, onion production of Osaka. Under the influence of him, the successful area was for the organization of the farmer. For example, it was reclaimed land of Hokkaido and Matsumoto farming association of Nagano. The influence of his activity extended to the foreign countries. Furthermore, he cooperated with the establishment of some schools. For example, they were Tokyo blind school, Shore (Kaigan) girls' school, Friend school, Aoyama Gakuin and Tsuda College.

Keywords : Sen Tsuda, Enlightenment, Christianity, Gakunousya, Agriculture Magazine